
龍の導き

ヒロハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の導き

【Nコード】

N4264W

【作者名】

ヒロハル

【あらすじ】

時は中世ヨーロッパ。小国ヴァルザニアは近隣諸国の侵略に怯えていた。時勢を重く見た王は、古き言い伝えに従い、竜の神の元を目指し、危険を顧みずひとり旅立つことを決意する。王は竜の神との間に、自らの命と引き換えに、竜の力を借りるという契りを結ぶ。約束は果たされた。

竜の力によりヴァルザニアの国は列国の支配から守られ、平和の訪れに国民は歓喜の声を上げた。

しかしこの勝利が、ヴァルザニアの未来を大きく変えていくのもの

になることは誰の想像にも及ばなかった。

十二年後のヴァルザニア。

城下町の居酒屋で育った少女アンナは、エリート部隊と呼ばれる竜騎士に憧れ、入隊を望んでいた。

過酷な試験を突破しても、入隊後も厳しい訓練が待っている。しかし最も彼女の望みを阻んでいるのが、入隊条件の第一が「男」であることだった。

序章 一 1 一 (前書き)

9 / 1 1 序章 一 1 一 に追記を致しました。

序章 一 一

中世ヨーロッパ。

小国ヴァルザニアは、プロメキア、ガザール、コルドの三大国に囲まれ、その侵略に怯えていた。それぞれがヴァルザニアを呑みこみ、力を強化することで他の二大国を手中に収めようと企んでいたからである。

時勢を重く見たヴァルザニア国王は祖国防衛のため、軍事力の強化を図ることにした。

当時の武器と言えば、剣、槍、斧、弓といったものが主で、大砲こそあれど、人々が身につけて持ち歩けるような小型の銃火器は未だ完成していなかった。

同じような武器を揃えたところで、ヴァルザニアの劣勢が変わるはずはなかった。

王は大臣たちを集め、意見を求めた。

我れ先にとばかりに大臣たちは進言したものの、いずれも有力なものではなかった。

王は、先程より沈黙を続ける最も年老いた大臣であるデームに意見を求めた。

デームは先代の王より仕えてきた大臣で、王家より賜る信頼は誰よりも厚い。しかし若い大臣たちに王 国の政を託すべく、自ら口を開くことは控えていたのである。

王の問いに対して、デームは白い髭に覆われた口をゆっくりと動かした。

「竜の神に力を借りなされ」

ヴァルザニアの北に高くそびえ立つ竜の山、その頂きには竜の神

とその下僕である竜たちが住むと、古くからの言い伝えである。竜の神は、自らの元へ辿りついた勇ましき者にはその偉大なる力を貸すことさえ拒まぬとのことだ。

但し、山へは一人で登らねばならない。そしてそれが容易いことでないのは誰もが知っている。頂きに辿りつくまで如何ほどの時を要すかもわからぬし、先人の通った軌跡もない。人肉を食らう獣も潜み、心を惑わす魔女も時に姿を現すと聞く。

かような険しい困難を潜り抜けて、頂きに辿りついた者こそ真の勇者として認められるのだ。

嘘か真かもわからぬ言い伝えのために、王を危険にさらすわけにいかぬと、他の大臣たちは反発した。しかしそれを黙らせたのは、他でもない王自身であった。

「ヴァルザニアの長たる私が祖国のために命を懸けずして、誰が命を懸けようか。案ずることはない。必ずや頂きに辿りつき、竜の神に我を真の勇者と認めさせると約束しよう」

ディムはかつての幼な子がかくも偉大に成長していたことを知り、静かに微笑んだ。



旅立ちの日は来た。王は竜の紋章が刻み込まれた甲冑を身に纏い、威風堂々と愛馬へ跨った。武器は短剣と長剣がそれぞれ一本、弓、矢が十数本。食物は十日分である。過度の荷を備えることはむしろ負担となると考えたのだ。

「ディムよ。アデルを頼む」

「はっ、仰せの通りに」

アデルとは、王が今は亡き妻との間に授かった、まだ歩くことさえできぬ幼き王子である。言うまでもなく、王はいずれ、その座をアデルに譲るつもりであった。その日まで命を失うことも、国を滅

ぼすこととしてはならぬという誓いを胸に王は手綱を握った。

「行くぞ！ ハッ！」

王が駆る馬に、五人の親衛隊が続いた。山へ入ることはできなくとも、せめて『竜の門』までは王を守りたいという意志からである。

竜の門。

二対の巨大な岩が対象に並ぶ、文字通り、山の門である。初めてここを訪れた親衛隊の一人は噂以上の存在感に思わず息を飲んだ。

「お前たちはここまでで良い。後は私が一人で行く」

王は親衛隊にそう言い残し、前へと進んだ。しかし親衛隊の中でも最も若いバイロンは王の言葉に背き、馬を進めた。

「殿下！ やはり私は最後までお供いたします！」

「来てはならぬ！」

王がそう叫んだ瞬間、頭上より岩が群れとなって襲いかかってきた。王の乗った馬は辛うじて岩を避けたが、バイロンは無残にも下敷きとなり、命を落とした。王は残る親衛隊に向かい、声を荒げた。「見よ！ もはや試練は始まっておるのだ。これ以上、お前たちが進むことは私が許さん。ただちに引き上げよ。良いな！」

王は再び馬を進めたが、もはやその後に続く者はいなかった。

（バイロンよ。お主の心、確かに受け取ったぞ）

流れる涙を拭うことさえせず、王は馬を走らせた。

鬱蒼と茂る樹木を縫うように王は馬を進めた。如何ほどか登ったところで、自然が作り出したと思われる小さな泉を見つけ、しばし休むことにした。

王が泉のほとりに屈みこみ、清らかな水で口をすすいでいたときである。背後で突然、樹木のきしむ音がした。振り返った王に向かって、そばに立つ樹木が倒れ掛かってきた。

（いかん！）

王は素早く身を転がして、どうにかそれを避けた。しかし安堵し

たのも束の間、傍らに立つ別の樹木が襲いかかろうとしていた。王は馬に飛び乗り、鞭を入れた。馬を前へ出すことで二本目の木もやり過ぎた。

休む暇はない。右、左、前、後ろ……次から次へと倒れてくる木を、王は馬を巧みに操り、流れる風のごとく、軽やかに交わしていく。この王、近隣諸国の名手の集う馬術大会で何度も優勝するほど、馬の扱いには長けていた。

迫り来る倒木の群れから逃げ延びた王が背後を振り返ると、まるで嵐が過ぎ去ったかのように、おびただしい数の樹木が地にひれ伏しているのが見えた。樹木の幹はいずれも、まるで刃物で切ったかのように綺麗に裂けている。とても自然の仕業とは思えない。

裂け目を観察しようとした王は、地を這う植物のツルが馬の脚に絡み始めていることに気付いた。ツルは馬体を丸ごと飲み込まんばかりの勢いで四方八方より伸びている。

王は素早く剣をふるい、ツルを切り落としたが、ツルは次から次へと再生し、馬体を地中へ引き摺り込もうと絡みついてくる。

（ここでも休ませては貰えぬか）

王は軽く苦笑いを浮かべた後、再び先を急いだ。

日が沈み、カラスが死肉を求めて鳴く声ばかりが耳に付くようになった頃、王はようやく一息付くことができた。

馬を降り、横たわる大木に腰を下ろすと、自然と溜息が出た。火を起こすと、食料を口にした。突然、襲いかかる試練にただちに対応できるよう、食い過ぎず、少な過ぎず、適度なものに済ませておいた。

辺りを一睨みした後、王はそのままの姿勢で目を閉じた。先を考えると、例え僅かでも休めるときに休むのが得策であった。

序章 一 2 一

カサカサと風が木の葉を揺らす音で王は目を覚ました。まだ薄暗くはあるが、確実に日は昇っている。しかし寝室のベッドで迎えるような、穏やかですがすがしい朝ではなかった。張りつめた空気に気が付き、王はゆっくりと立ち上がって声を上げた。

「出てくるが良い！」

王の言葉は静かな森に木霊したのみで、何も起きない。思い過ぎなどではない。何者かの気配を王は感じていた。

「私はお前たちの敵ではない」

再び王の声が木霊する。

しばしの時を経て、弓を構え、矢を引絞った小人が一人、姿を現した。身の丈は四尺（約1.2m）ほど。革製の衣服を纏い、木彫りの面を被っているため、その表情までは窺い知ることはできない。それを合図としたかのように、次から次へと別の小人が姿を現した。皆、王に向かって弓や槍を構えている。その強烈な警戒心から王は彼らが身を潜めているのを見破ったのだ。

「武器を仕舞ってはくれぬか？」

言葉が通じないのか、彼らが従う様子はない。

（戦うしか手はないのか。ここでのんびりとしているわけにはいかん）

王が剣の柄に手を掛けた瞬間、前に進み出てくる小人がいた。他の者のように武器は持っていない。木の面を付けているため、若いのか老いているのかはわからない。しかしその立ち振る舞いから察するに、小人たちの長であることに間違いはない。

「ここへ何しに來たのだ？」

低く唸るような声で、王を威嚇する。王が剣から手を離し、構えを解いても小人たちは武器を下ろさない。

「勝手にお前たちの領地へ入ったことは謝る。しかし私はここに用

があるわけではない」

「ならばどこへ行く？」

「竜の神の元へ」

その言葉を聞くと、他の小人たちも王に向かってゆつくりと踏み込んだ。

「そうか。やはり黙って通すわけには行かん。あんたに恨みはないが、これも試練じゃと思うてくれ」

小人の長が手を振り上げると、弓を構えた者たちが一斉に矢を放った。無数の矢が王に向かって降り注ぐ。王が身を避けるほうが早く、矢は全て大地に突き刺さったのみだった。

王は上手に位置する小人の群れに飛び込んだ。小人たちは新しい矢を引く間もなく、次々と切り倒されていく。下手より矢が飛んでくることもない。仲間にあたることを恐れているからだ。

それならばと、槍を持つ者が王に向かって襲いかかった。槍とて矢と同じ、一定の距離を保っていなければ、威力を発揮することはできない。王は華麗に宙を舞い、瞬間的に間合いを詰めて、小人たちを退けていく。上手の者たちが全て切り倒されると、下手の者が弓を構え、矢を引き絞った。そこで長が声を上げた。

「それまでじゃ！」

小人たちは構えを解き、武器を下ろした。しかし納得したわけではなかった。長のそばにいる者が口を開いた。

「しかし長老、奴は我らの仲間を……」

「案ずるでない。このお方は一人も殺めてはおらん」

「えっ……」

長の言うとおりに、倒された者は皆、絶命したわけではなく、気を失っているだけだった。長老と呼ばれた男は木の面を外し、王に軽く会釈をした。長老と呼ばれるにふさわしい深い皺を顔中に刻み、立派な白い髭を蓄えていた。

「一つお答え下され。何故、竜の神に会いなさるおつもりか？」

「愛する民を、国を、列国の支配より守るため、竜の神の力が必要

なのだ」

「己の命を失っても？」

「失うことはない。手足をもがれ、身を引き裂かれ、例え魂だけとなっても私は竜の神に会わねばならぬ」

王の言葉を聞き、長老が優しくそして静かに微笑みを洩らした。

「ヴァルザニアの王の名に恥じぬ、力強きお言葉。試練はまだ始まったばかり。用心しなされ」

長老が木の面を被ると、小人たちの姿は景色に同化するかの如く、音もなく消えていった。



王は迷うことなくひたすら頂きを目指した。山へ入って幾日目かの夕刻のことだった。

突然、轟音と共に大地が激しく震え始めた。馬が落ち着きをなくし、いななきと共に暴れ始める。バランスが崩れ、馬体が傾く。振動のためではなく、馬の脚が地に飲み込まれているのだ。それでもどうにか馬を進めようと王は鞭を入れるが、効果はなかった。

（このままでは……）

王は掴めるだけの荷を手にして、馬を捨てた。苦渋の選択であった。

大地の揺れは未だ留まることを知らない。立っていることさえままならぬ揺れに、王は膝をつき、悲しげな目をして地中へ消えていく馬の姿を見つめていることしかできなかった。

揺れが収まり、山は静けさを取り戻した。長い道のりを馬なしで進むことがどれほど酷であるか、王には見当さえつかなかった。

しかしここで投げ出すわけにはいかない。王が荷を担いだ瞬間だった。

目の前の地面が勢いよく隆起した。四方八方に土を跳ね飛ばし、巨大な生物が姿を現した。全身が黒い毛に覆われており、二本の足

で立っている。身の丈は十尺（約3 m）を超えると見え、かつて狩りに出たとき、目にした野生の熊でさえ王には赤子に思えた。

口元に生える長い牙に唾液を滴らせ、不気味な赤い目で王を見据えている。王が剣を抜くと、獣は雄叫びを上げながら王に襲いかかった。鋭い爪を備えた右手が王に向かって振り降ろされた。

王は素早く身を動かしてそれを避けたが、甲冑には三本の爪跡が刻まれた。幸い身を切られるところまではいかなかったが、獣は休むことなく、次を仕掛けてきた。爪が風を切る音が共に、立ち並ぶ樹木が裂ける。

獣はその巨体に似つかわしくない素早さで王を追い詰めていく。

（このままではいずれこちらがやられてしまう）

しかし反撃へ出ようにも、長い爪をもつ獣の間合いは広く、剣の届く位置までうまく接近することができない。矢を放とうにも弓を構える暇さえない。

（長い爪……そうか！）

王は剣を鞘に戻し、乱立する樹木の前に立った。王に策があることなど知らぬ獣は、動きを止めた獲物を恰好の的とばかりに爪を振り降ろす。王はすんでのところでそれを交わした。後ろの樹木が幹をえぐり取られ倒れ始めた。他の樹木に寄りかかったため、地に付くまでには至らなかった。

王は剣を抜くこともせず、無防備な態勢のまま、別の樹木の前に入った。獣は唸り声を上げながら赤い目で王を睨む。

「どうした？ もうかかって来んのか？」

王が両手を広げて獣を挑発する。獣は言葉が理解できるらしく、これまでも増す素早い動きで王に襲いかかった。しかし爪は別の木の幹をえぐり取っただけだった。

「終わりか？」

王は嘲笑を浮かべながら、獣に向かって手招きをする。獣は理性を失ったかのように両腕を振り回すが、王は涼しげな顔でそれをこごとく交わしていく。

繰り返し山の中に木霊する、爪が風を切る音と樹木の幹が裂けて傾く音。

あれほど激しく暴れ回っていた獣が突然、動きを止めた。倒れることなく互いに支え合った樹木が獣の周りに檻を作っていたのだ。それでも獣は王の体を切り裂こうと手を上げたが、樹木に阻まれ思うようにいかない。もはや獣になす術はない。

王は獣の懷へ飛び込み、胸に剣を突き刺した。赤茶色の血が吹き出し、体を覆う黒い毛を伝い始めた。獣は最後の雄叫びを上げながら、前のめりに倒れた。そして樹木に寄りかかるようにして、息絶えた。

「許せ。これも我が国と民のため」

王は獣の血を振り払った剣を鞘に納めると、荷を担いだ。もう馬はない。これより先は歩いて進むしかないのだ。数歩進んだところで王は軽い眩暈を感じた。立ち止まって頭を振った後、辺りへ視線をやってみた。

先程と何も変わらぬ風景。

（気のせいかな……）

苦笑いを浮かべた瞬間、再び眩暈が王を襲った。目の前がグルグルと回り、天と地が逆になる。王の体が倒れるより先に、意識は遠退いていった。

序章 一三一

小鳥のさえずりが聞こえる。

試練しかないと思っていたこの山にも安らぎがあったようだ。

いや、小鳥のさえずりはいつも聞こえていたのだ。それだけではない。木の葉が風にそよぐ音や川のせせらぎも……。

ただ王はそれに気付いていなかったただけだ。

背中に伝わってくる柔らかな感触。体中を包み込み、心まで癒してくれそうな優しさがある。初めて知るものではない。ずっと昔から感じることできていたもの……ただ、今の王にとっては懐かしいもの。

ベッドの上だった。木の丸太を積み上げて作られた部屋の中、甲冑は脱がされ、武器や食料などの荷もどこにも見当たらない。王はベッドから飛び降りて、窓を開いてみた。

驚くことにそこには美しい緑の草原が広がっていた。

(ここは本当にあの竜の山か……)

背後で扉の開く音がした。王は素早く振り返り、身構えてはみたものの、すぐに動けなくなってしまった。

「目を覚まされましたか？」

透き通るような白い肌に、艶やかな茶色のロングヘア、長い睫毛と二重の瞼に守られたエメラルドの瞳、すっと通った鼻筋……世にも美しい女性がそこに立っていたのだ。決して煌びやかなドレスや宝石で着飾っているわけではない。綿で織られた衣服を身につけているだけに気品に満ちてた女性だった。

しかし王の体を縛りつけたのは、それだけが理由ではなかった。

「ソフィア……」

王が思わず口走ったその名に、女は首を傾げた。

「はい？」

「いや、すまない」

(そんなはずはない)

王は自分の考えを自ら否定し、女に向き直った。

「あなたは？」

「私はサンドラ。あなたが森で倒れているのを発見して、ここへお連れしたのです」

「そうだったのですか。それはかたじけない」

「いいえ、お気になさらずに。それより食事を用意しております。大したものではありませんが、少しくらい足しになるかと」

サンドラの言葉通り、テーブルに並んでいた食事は質素なものだった。しかしほのかに漂ってくるパンと野菜スープの香りは嗅ぐだけでも、食欲を刺激された。テーブル中央のバスケットに盛られたオレンジの皮は、太陽のように眩しく輝いている。

王が食事に手を付けずにいると、サンドラが優しく微笑んだ。

「ご心配なく、毒など入っておりません」

「いや、そういうわけでは……」

それでも王が動かないため、サンドラは自分の皿と王の皿を入れ替え、パンとスープを一口ずつ食べてみせた。「いかがですか？」と言って、もう一度微笑んだ。そこまでされて、王も食べぬわけにはいかず、そっとパンに手を伸ばした。

「ここにお一人で住んでおられるのですか？」

「はい」

「それはまた遅いことだ」

「そんなことはありません。女一人食べていくくらいどうにでもなります」

「そんなものですか？」

「ええ」

王はスープにも口を付けた。味は申し分がなかった。確かに毒は入っておらぬようだ。

「そう言えば、私の武器や荷物はどちらにありますか？」

「それなら心配には及びません。大切に保管しております」

「そうですか。それなら良かった。しかし大変だったでしょう。私を背負ってここまで来るのは」

「いいえ。実を言うと……少し引き摺ってまいりましたから」

上品に笑うサンドラの美しさに王の心が少しずつ乱れ始めた。

「しかし武器や荷物までとなれば、かなりの重労働だったでしょう？」

「数回に分けて運びましたから」

「そうですか……やはりあなたは逞しい人だ」

「女に逞しいは褒め言葉にはなりませんわよ」

サンドラは悪戯っぽく言い放ち、じっと王を見る。

（仕草まで似ている……しかし……）

「これは失礼をした。どうかお許しを」

王が胸に手をお当て、大袈裟に頭を下げると、サンドラはまた微笑んだ。

「ところで、あなたはどのようにあのような所に倒れていらしたのかしら？」

サンドラがバスケットからオレンジを一つ掴み取り、ナイフで皮を剥き始めた。

「旅を続けております」

「旅？」

「はい。山の頂きを目指しております」

「頂き？　そこに何かあるのですか？」

「はい。希望があると聞きます」

「希望？　まるで詩人のような言い回し。たった一人で試練を乗り越えて、頂上を目指すのであれば、恐らくとても価値のあるものなのでしょうね」

王は静かにスプーンをテーブルに戻した。

「美味しかった。ありがとう」

「オレンジも召し上がって下さい」

「いいえ、これ以上は……私も先を急ぐ身ゆえ、長居をするわけにはいきません。荷物はどこに……」

「お待ち下さい！」

席を立ち、部屋を出ようとする王の前にサンドラは立ちはだかった。そして王の胸にその体を預けた。

「先程は、女一人食べていくくらいどうにでもなると申しましたが、あれは嘘なのです。本当は心細く、いつ自ら命を絶とうかと思っていたところです。どうか、このままそばにいて下さいまし」

サンドラはそのエメラルドの瞳を濡らしながら、必死に訴えかける。

（ソフィア……）

ソフィアとは亡くなった王の妻だった。サンドラはソフィアと瓜二つ。王はその姿に亡き妻を思う。

「お願いでございます。数日、いいえ、今宵だけでも構いません」
王の腕を掴むサンドラの両手に力が入る。

「どうしても行くというのであれば、ここで私の命をお絶ち下さい」

自分をじつと見据えるサンドラの目に、王はその覚悟が真であることを知った。

「あい。わかった。ただし、今宵だけだ」

サンドラの顔に光が差した。

「真にございますか」

王は静かに頷いた。「ありがとうございます」と何度も繰り返し、サンドラは王の胸の中で泣いた。

序章 一 4 一

夕食を終えて、王がベッドで横になっていると、静かに部屋のドアが開いた。サンドラだった。窓から差し込む僅かな月灯りでさえ、彼女が一糸纏わぬ、生まれたときと同じ姿であることはわかる。王は体を起こしてベッドに座り直した。

「生憎ベッドは一つしかなくて……そばに行かせていただいても構いませんか？」

その言葉の意味するところは、もちろん、王にもわかっていた。静かに頷いた王のそばへサンドラは腰を下ろした。美しい曲線を描く彼女の裸体を目の前にして、胸中穏やかでいられる男はいないだろう。サンドラが王の耳元でそっと囁いた。

「今宵だけは私を亡くなった奥方様と同様に愛して下さいませ」

王の指がサンドラの頬を伝い、耳に触れ、そして長い髪へと這っていく。

「いいとも」

王はサンドラの小さな肩を抱いてベッドへ寝かせると、自分が上になった。彼女の唇に自らの唇を重ねるため、ゆっくりと顔を近づけていく。サンドラは待ち切れず、王の首の後ろへと両手を回した。その瞬間、サンドラが大きく目を見開いた。口から吐き出した赤い血が唇を伝い、ベッドに滴り落ちた。

王の隠し持っていたナイフがサンドラの胸に突き刺さっていた。ブーツの底に仕込んであったものだ。

「なぜ……」

「お前がまやかしの術を使う魔女であることは見抜いておった」
全てはサンドラの言葉からだ。サンドラは王を引き摺って運んだと話したが、あの細い腕で重い甲冑を身につけた王を一人で運ぶのは不可能だ。武器や食料も女にとっては決して軽いものではない。旅をしていると言ったが、「たった一人で試練に立ち向かって

いる」ことは話してはいない。

そして「亡くなった奥方様と同様」という言葉。なぜ王に妻があり、命を亡くしたと知っていたのか。

「ソフィアの姿を真似て、私を惑わすとはな……」

サンドラが呻き声を上げ、その美しい体から肉が落ちていく。至るところに皺が刻まれ、皮膚が落ち、骨だけの醜い姿に変わった。やがて骨さえも解けるように蒸発し、ベッドや丸太小屋、美しい緑の草原も姿を消した。

再び辺りは鬱蒼と樹木の茂る森へと戻っていた。王の武器と甲冑、荷はその傍らに転がっていた。

（頂きはまだか……）

王は額の汗を拭い、深い溜息をついた。

◇ ◇ ◇

城を発ち、山へ入って既に幾日過ぎたのか。

もはや王にもわからなくなっていた。体は日増しに重くなってゆき、食料も底をついていた。野草や蛇さえ見当たらず、空腹を満たすものは何一つなかった。

あれほど茂っていた草木はどこにも見えなくなり、辺りはいつしかひび割れた大地と、風に吹かれて不気味に踊る枯木だけになっていた。

（あれは……）

王の視線の先にいくつもの岩が連なり、壁を作っていた。中央が大きく開いており、中へと道が続いている。

（あの中に竜の神はおられる）

誰かにそう教わったわけでもなく、わずかな確証さえないが、王はそう感じていた。

わずかに気を楽しにした王の前に、ドス黒い霧が立ち込めた。突風

が吹き、霧が晴れると、不気味なものが宙を漂っていた。大釜を手
に持ち、黒装束を身に纏った人骨……言わずと知れた地獄からの遣
い『死神』であつた。

「よくここまで辿り着いたものよのう」

死神はヒッヒッヒッと甲高い声で不気味に笑った。

「既に察しはついておるだろうが、竜の神はあの洞窟の中におる」
「貴様が最後の試練か？」

王の問いに対し、死神は再び不気味に笑う。

「そうと言えば、そう。否と言えば、否。俺も神の端くれ。竜の神
の下僕とは違う。俺の目的はここにくたばる人間の魂をいただくこ
と。奴のためではなく、俺自身のためにな」

「そうか。しかしお前が何者であろうと、私には無関係だ。邪魔立
てする者は斬る」

王が鞘より剣を抜いた。

「ヒッヒッヒッヒッ。勘違いするな。お前の敵は俺ではない」

「何？」

「気が付かぬか？ まあ、無理もない。お前の眼には見えぬからな」
王は体が突然、鉛を乗せられたように重くなるのを感じた。肩か
ら足の先まで……全身が大地へと吸い込まれていくかのようだ。

「これは……いったい……」

「死霊共さ。お前を地獄へ連れて行こうと寄って来たのだ。俺には
よく見える。背中と腰の辺りに一人ずつ、両腕、両足に二人ずつ」
死神の甲高い声が木霊する。王は死霊共を振り払わんと、身を激し
く揺さぶったが、まるで効果がない。右手から剣が抜け落ちた。

「そやつらは『生きていたい』という思いが強い奴ほど好物なのよ。
そう、お前のようにな」

死神の言葉通り、王がもがけばもがくほど、死霊共の力は強くな
ってゆく。しかし抵抗を止めれば、そのまま地獄行きだ。

王の膝が曲がり始めた。実体がないにも関わらず、なぜこれほど死
霊共は重いのか。恐らく現世に残した悔いや恨みが力を生み出して

いるのだろう。

ついに王の膝が地についた。死霊共のそのまま王を押しつぶそうと一層力を増す。上半身が前のめりになる。倒れてしまわぬよう、王は両手を地について体を支えたが、震えが強くなり、肘が曲がる。(これまでか……)

その瞬間、王の頭の中にある光景が見えた。

まだ幼き息子アデルの寝顔、天に向かって勇ましく剣を掲げるヴァルザニアの兵士たち、笑顔に満ち溢れた街の人々……。

そこへ姿を現した異国の侵略者たち。人々の悲痛な叫び声が木霊する。兵士たちは体中に傷を負い、次々に大地にひれ伏していく。侵略者の刃はついにアデルへ振り降ろされた。

王の目の前が真っ赤に染まった。

(私が死んだら……ヴァルザニアはどうなる)

「ヌオーッ！」

王が雄叫びと共に体中に力を入れた。両手で体を支えながら、右足を立てた。右膝と、左足の爪先を伸ばそうとする。

「死んではならぬ……死んではならぬのだ」

食いしばった歯から血が零れる。死霊共は更に力を込めたが、王の執念がそれを上回り、ついに王は立ち上がった。足元にある剣を拾い上げ、大地に突き刺した。剣を支えにし、膝を震わせながら、死霊共を引き摺って足を前に出した。

ゆっくりとだが、一歩ずつ確実に洞窟へと向かって進んでいく。そのうち一人、また一人と死霊共が姿を消していった。洞窟の入口に辿りつく頃には王は自由の身となっていた。その様子を見ていた死神は体を震わせた。

「なっ、なんという精神力……死霊共が手を引きおったわ」

死神は自らの思惑が外れてしまったことをむしろ楽しんでいた。

「まあ、良い。いずれまたお前とは再会することになるだろう。そのときを楽しみに待っておるぞ」

死神は不気味な笑い声を残しながら、その姿を霧へと変え、王の

元を去っていった。

序章 一五

王は洞窟の中へと足を進めた。空気は冷たく、凍えてしまいそうなほどだ。両側の岩壁には突き刺さった松明が、行く先を延々と照らしている。それはあたかも人の手によって作られた物のようだった。

「ハッ！」

洞窟の奥まで進み、王は目にした光景に思わず声を上げ、息を飲んだ。先頃、王の命を狙った赤目の獣など比べるに足らぬほど、巨大な生物がそこには横たわっていた。

頭から尾までを覆う、いかなる攻撃をも跳ね返してしまいそうなほど頑強に見える黒い鱗。背中に備えた堂々たる翼は、強風や突風を一切寄せ付けず、空を自由に我がものにできるであろう。青い瞳は宝石のように美しく輝き、この世の全てを見通してしまいそうなほど澄んでいる。

王の目の前にいるのは、言うまでもなく竜の神であった。

王の姿を見た竜の神はその長い首を高く持ち上げ、低く張りのある声を出した。

「ここまでやって来る人間が真におるとはな」

王はその場に片膝をつき、右手を胸に充てた。

「私は……」

「良い」

王の言葉を神が遮った。

「何も言わずともわかっておる。そなたはヴァルザニアの王。国のため、民のため、私に力を借りに来たのであろう？」

「ハッ。おっしゃる通りでございます」

「うむ。そなたの勇ましき姿、存分に見せてもらったぞ」

これでヴァルザニアは救われる。王はそう思っていた。しかしま

だ胸を撫で下ろすには早過ぎた。

「そなたに最後の試練を言い渡す」

「最後の試練？」

「いかにも」

「どのようなことでございましょう？」

「そなたの命を私に捧げよ」

王は自らの耳を疑った。何ということか。ここまで「死んではならぬ」と必死に守り通してきた命を最後の最後で「捨てよ」というのか。

「どうした？　できぬか？」

神の問いに王は静かに笑った。

「いいえ。城を発ったときより、この命を捧げる覚悟はできております」

竜の神に会うという目的を達した今、王にとって命を守る必要はもうない。

「私ごときの命でヴァルザニアが救われるのであれば、喜んで差し上げましょう」

「うむ。よくぞ申した。それでこそ、真の勇者。案ずることはない。ヴァルザニアの未来、確かに私が預かった」

「これで思い残すことはございません」

王の言葉を聞き届け、神の青い瞳が黄金に輝いた。その眩さに王は目を閉じた。

（さらば、我が祖国ヴァルザニア。さらば、我が息子、アデルよ……）

◇ ◇ ◇

ヴァルザニアでは、未だ帰らぬ王の身を案じ、国中が騒然としていた。それどころか「王は既に命を落とした」と、根も葉もない噂まで流れる始末だ。

誰もがそれを否定し、信じたくない気持ちを抱いていたが、決定的な証拠もなく、はっきりと、「王は生きている」と言える者は一人もいなかった。

王をただ一人で試練へと立ち向かわせたことをディムは誰よりも悔いていた。

「あの老いぼれが余計なことを申したばかりに」と、彼を口汚く罵る大臣も少なくはなかった。幼きアデルが上げる泣き声ですら、自分を責めているような気がして、ディムの心は打ちひしがれていた。何よりも恐れるは、「王が死んだ」という吹聴が他国へ知れ渡ることであった。

そしてその懸念は真のこととなった。

大臣たちが今後の政について話し合いの場を持っているところへ、一人の兵が飛び込んで、息を整えることもせず、声を響かせた。「大変にございます。コルドの……コルドの軍勢が攻めてまいりました！」

「何と！」

大臣たちが一斉に立ち上がった。

「恐れていたことが……」

一人呟くディムを置き去りにして、他の大臣たちは急ぎ足で部屋を出ていった。

コルド軍の突撃隊長であるダミアンは、後に続く兵士たちに檄を飛ばした。

「ヴァルザニアに王なし。一気に城を攻め落とし、ここを我らが進撃の拠点とする。真の目的はプロメキアとガザールを落とすこと。この戦はそのための足掛かりに過ぎぬ。皆、わかっておろうな！」

兵士たちは剣を天高く掲げ、雄叫びを上げる。

「よし、撃て！」

ダミアンの言葉を合図に、大砲が火を噴いた。

轟音がとどろき、鉛の玉がヴァルザニアの街を守るレンガ造りの壁に突き刺さった。赤茶色のレンガがボロボロと崩れ落ちる。

「一か所を集中的に撃ち、壁をぶち壊せ！」

再び轟音と共に打ち出される鉛の玉。衝撃で壁がうねる。

コルド軍の位置しているのは、ヴァルザニア軍の大砲の射程距離を大きく逸れたところだった。武器にかけてはやはりコルドのほうが進歩している。

しかし自分たちから門を開き、外へ飛び出していくのもあまりに危険が大きすぎる。ヴァルザニアの守備隊長であるリオネルは、敢えて壁を破らせ、攻め込んできたところを一気に叩くという策を選んだ。

砲撃の音を聞いた街の人々は皆、家の中へ閉じこもって息を潜めた。武器を手にした敵兵の前では何の役にも立たぬことを知りながらも、扉や窓の鍵を掛けることは忘れなかった。

四度目の砲撃で、壁の一部に巨大な穴が開いた。

「あの壁の綻びより中へ入り、門を開けよ！」

第一突撃隊の兵たちが我先にと一斉に馬を走らせた。蹄が大地を蹴る音が地鳴りのように響き渡る。迫り来る軍勢を前に、リオネルが自軍の兵たちを活気づける。

「我々の誇りに懸け、一歩たりとも敵を入るでない！」

序章 一六一

兵たちは壁の割れ目より、一斉に矢を放つ。進行してくる方角が一つのため、的は絞り易い。馬を射られたコルドの兵たちはバランスを崩し、鞍より落下する。後続の兵たちもそれに巻き込まれて転倒していく。

「休むな！ 次を射よ！」

兵たちは立て続けに矢を放つ。しかしコルド軍の進撃を止めるには至らない。軍勢は目の前に迫っていた。

「やむを得ん。外へ飛び出し、応戦せよ」

リオネルが右手を振り降ろすと、兵たちは壁の綻びより飛び出し、剣を抜いた。

おじけづいて、逃げ出す者は一人もいない。誰もがリオネルの言う「兵としての誇り」を持っていたからだ。

「王が戻られるまで、我々でヴァルザニアを守れ。良いな！」

しかし誇りだけでは戦に勝つことはできなかった。

コルド軍の数の多さと兵としての熟練度の高さに、ヴァルザニアの兵たちは次々に倒されていった。

そしてついに街への侵入を許してしまった。

「俺が一番乗りだ！」

言葉通り、一番に街へ入ったコルドの兵が歓喜の雄叫びを上げた。そして他の兵たちも街の中へ雪崩れ込み、そのまま城門へと向かった。城門の守備はより一層厚いものだったが、コルドの兵が馬上より繰り出す槍にヴァルザニアの兵たちは苦戦した。

防戦一方のヴァルザニア軍の隙をつき、コルドの兵たちは閉ざされた堅い鉄の扉を開くことに成功した。

その様子を遠くより窺っていたダミアンは高らかに笑った。

「門は開かれた。全軍、城を目指せ！ 街人には手を出すでないぞ

！ 奴らは将来の戦力となるからな。但し、逆らう者は殺して構わん！」

コルド軍の全ての兵たちが前進を始めた。ヴァルザニア軍の抵抗をあっさりと払い除け、街の中を我が物顔で走り回る。いくつもの悲鳴と血飛沫が上がり、ダミアンの勝ち誇ったような笑い声が木霊する。

コルド軍の侵攻は、城に繋がる湖を跨ぐ橋へと達した。ヴァルザニア城にとって最後の砦であるここを突破されれば、城の陥落も時間の問題であった。

「もうダメだ」

城より戦況を見守っていた大臣の一人が膝をついた。項垂れる者や両手を組んで天に祈る者もいる。

ディムは静かに目を閉じ、王に謝罪した。

「王よ。お許しください。我々は貴方の帰りを待ち切れなかった」

「何としても橋を守り切れ！」

リオネルは枯れそうになる声を必死に絞り出した。しかし無情にも、彼の目の前で、自軍の兵たちは地に平伏していく。

（かくもあっさりと落とされてしまうとはな……）

リオネルの前にダミアンの駆る馬が迫っていた。ダミアンは構えた槍を頭上で勢いよく振り回す。

（もはや、これまでか……）

リオネルが覚悟を決めた瞬間だった。四方八方より一斉に声が上がった。

「なっ、何だ！ あれは？」

コルドもヴァルザニアも関係なく、誰もが空を見上げている。リオネル、ダミアンもそれに倣った。

黒い鱗に覆われた体、背中に備えた巨大な二枚の翼、美しい輝きを放つ青い目。

「竜だ！」

一頭や二頭ではない。数十頭の竜が群れとなってヴァルザニアの空を舞っている。大地を揺るがす声を上げ、竜たちがコルド軍に襲いかかった。長い尾を振り回せば、兵を蹴散らし、翼を羽ばたかせれば遠くへ吹き飛ばす。最も強烈なのは口から吐き出す炎で、人間であれば、一瞬にして燃え尽きて灰になってしまう。

鱗は堅く、矢は突き刺さることなく弾かれ、鈍ら刀では引っ掻き傷さえ負わせることもできない。

「ええい、怯むな！ 城は目前。前進あるのみぞ！」

ダミアンが再び槍を構えたところへ、一頭の竜が急降下で空から襲いかかり、馬ごと地面へ押し倒した。鋭く尖った後ろ脚の爪が甲冑を貫き、ダミアンの心臓を鷲掴みにしていた。身の丈が六尺を超える黒い竜は、長い首を振り回し、辺りに炎を撒き散らした。

リオネルは初めて間近で見るその雄々しい姿に戦慄していた。

竜の圧倒的な強さと指揮官を失ったことにより、コルド軍は撤退を開始した。

リオネルは深追いせぬよう兵たちに告げたが、竜の群れはヴァルザニアの上空を旋回し、いつまでも睨みを利かせていた。

「王は……竜の神の元に辿りついておられた」

デームが声を震わせ、静かに涙を流した。

「では、いずれ、王は帰って来られるのでしょうか？」

「おお、そうに違いあるまい」

「さすがは我らがヴァルザニアの王！」

胸を躍らせているのは、皆、同じであった。微笑み、肩を抱き合い、王の勇気を称え、帰りを心待ちにした。

突然の侵略より国が守られたことに街人たちも湧き立っていた。扉を開き、外へ飛び出し、踊り、唄い、宴を催した。

竜に守られたヴァルザニアはもはや他国の侵略に怯えることはなくなつた。この平和は永遠に守られていく。誰もがそう信じて疑わなかつた。

しかしこの勝利が、いずれヴァルザニアの未来を大きく変えていくことになることは、誰の想像にも及ばなかつた。
そして王も二度と歸らなかつた。

序章 一六一（後書き）

これにて序章は完結。いよいよ次回より本編がスタート致します。
読んでくださっている皆様、誠にありがとうございます。

ここまでの感想が何かあれば、是非お願いします。
一言でも結構です。

第一章 一 一

ヴァルザニアへの侵攻に失敗したコルドは弱体化し、プロメキアに狙われることとなった。

強大なる竜の力を目の当たりにしたコルドは、その力を我が物にせんと、再びヴァルザニアへ兵を勧めた。しかしその目論見は見事に碎かれ、コルドはますます力を失った。ヴァルザニアは、領土の一部譲渡されることを条件に、コルドと手を結ぶこととなった。

また勢力を増すヴァルザニアに対し、プロメキアとガザールの間にも、互いの領土に侵攻せず、ヴァルザニアに対し共同で戦線を張るという条約が締結された。

ヴァルザニアの王と竜の神の間に契が交わされてから、実に十数年が経っていた。



ヴァルザニアの城下町にある居酒屋『ブルーアイズ』。

今日も街中の飲んだくれ共が酒を求めて、店に集まっていた。

「何だって！ もう一度言ってみなよ！」

『ブルーアイズ』の店主、ジゼルの娘であるアンナが、鼻を赤くした一人の男の言葉に噛みついた。

「何度でも言ってるさ。女が竜騎士になるなんて、夢は眠っているときに見ろってな！」

周りの男たちも一緒に笑った。

竜騎士……変わりゆく異国との情勢に対し、竜の力を存分に生かし、それを素早く戦場に展開させるために結成されたのがヴァルザニアの竜騎士隊だった。

竜の背にまたがり、その力を自在に操る彼らは、常に戦場の主役であり、人々の憧れであった。

「女は竜騎士になれないって、規則を知らんのか？」

もちろん、アンナもそれは知っていた。しかし「竜騎士になりた
い」という望みを捨て切れない彼女は、入隊資格年齢の十五歳を超
えたとき、入隊試験への挑戦を直訴するつもりであった。

アンナを馬鹿にする男は更に彼女を刺激する。

「まあ、その細腕じゃ、規則がなくなつて無理だろうけどな」
しかしアンナはそれを笑って返した。

「はははは。あんたみたいな木偶の坊より、余程マシだろうけど」
「なんだと、このクソガキ！」

頭に血が昇ったのは男のほうで、テーブルのグラスを叩き割って
立ち上がった。横にも縦にも体は大きく、確かに腕っ節は強そうだ。
「試してみるかい？ 木偶の坊さん？」

アンナはウィンクと投げキッスを男に贈った。周りから笑いと拍
手、ピューピューと口笛が巻き起こる。

「もう許さねえ！」

アンナに襲いかかる男。両手を広げて突っ込んで来るその巨体を
アンナは素早く交わし、背後に回った。男が振り返ると、アンナは
不敵な微笑みを浮かべて、手招きをしている。

「このクソガキ……」

男は身を翻し、再びアンナへ向かってきたが、アンナはそれも軽
やかにかわした。男の体は隣のテーブルにぶつかり、料理や酒を床
にぶちまけた。年寄りの男がそばへ寄ってきて、「ああ、勿体ない」
と床に落ちた料理を拾い上げて口に放り込んだ。

騒ぎを聞きつけたジゼルが厨房から飛び出してきた。カウンター
に座っていた若い男が呆れたように、酒臭い息を吐き出す。

「おかミさん……アンナ、またやってるよ」

髪こそ短く切りそろえているが、大きな瞳に長い睫毛をしたアン
ナは、お淑やかにしていればとてもかわいい少女であった。しかし
本人はその辺りにまるで自覚がなく、男勝りが売りだと思っていた。
アンナのおてんばぶりには、母親であるサラも手につけられないで

いた。

「ああ……あたしや熱が出てきたよ……」

額を押さえて後ろに倒れるジゼルを若い男が支えた。

「おっ、おカミさん、しっかりしてくれ！」

アンナは巨体を震わせる男を更に挑発する。

「鬼さん、こちらってね」

「舐めるな！」

男は体中の血管が浮き出すほど、怒り狂っており、もはや手加減をする様子はない。荒い息を鼻から吹き出した後、次は肩から突進してきた。アンナは素早く男の体の下にもぐりこみ、鳩尾に向かって右拳を突き上げた。

「ぐえっ……」

男の口から唾液と共に酒が吐き出され、そのまま床にひれ伏した。アンナは拳を天高く掲げ、勇ましく笑った。

「イエーイ、やるもんだ！」

拍手喝采、野次馬たちは湧き立った。しかし倒された男の仲間たちは黙っていなかった。

「お嬢ちゃん、ちょっとお遊びが過ぎたようだな」

先程の男に負けず劣らずの体格のいい男たち、三人が指の関節を鳴らしながらアンナに近寄って来る。

「あんたたちも遊びたい？」

「ほざけ！」

三人が一斉に襲いかかったが、やはりアンナは体を風のようによがせて、男たちの攻撃をさらりと交わす。苛立ちを覚え、冷静さを欠いた一人の男は勢い余って壁にぶつかり、気を失った。

別の男はテーブルを持ち上げ、アンナの頭上に振り降ろそうとした。しかしそのせいで胴ががら空きとなり、むしろ彼女には隙となってしまった。アンナの飛び蹴りが腹にさく裂し、男はそのままテーブルの下敷きとなった。

最後の一人となった男は酒の瓶を振り回した。アンナは一定の間合いを計りながら、それを避ける。テーブルの上に置かれた空いた皿を何枚か手にし、ブーメランの要領で、男に放り投げた。シュルシュルと回転しながら宙を舞う白い皿を、男はうまく交わした。皿が壁にぶつかって砕け散る音が、野次馬たちを興奮させる。

「あら、お上手！」

一人の野次馬がそう言うのと、皆が大声を上げて笑った。

「これならどう！」

アンナが二枚目、三枚目を立て続けに投げる。男はふらつきながらも、それを避ける。アンナも休むことなく、皿を投げる。男が皿を避ける度に拍手がわく。男も気を良くしたのか、得意げに笑う。そしてアンナの手元にもう皿はなくなっていた。

「ヘッヘッヘッへ、これまでだな。小娘」

男が勢いよく酒の瓶を振り上げた瞬間だった。

彼の脳天に鉄の盆が直撃した。ゴンという心地の良い音が鳴り響いて、男は気を失った。手にしていた瓶が割れ、頭からブドウ酒を被った。男の後ろには、盆を持ったジゼルが顔を赤くして立っていた。

「アンナ、いい加減におし！」

「だって、コイツらが……」

アンナが口を尖らせて弁解をしようとするところへ、新しい客がやってきた。

「何の騒ぎか！　これは……」

第一章 一 二

声を上げたすらりと背が高い男は鎖帷子を纏い、腰には剣を一つ差している。帷子に刻まれた竜の紋章を見て、騒然とした店内は静まった。しかしその男の後に続いた髭を生やした男を見て、再び誰もが落ち着きをなくした。

「セヴラン様だ……」

ヴァルザニアの国で、この男セヴランを知らぬ者はいない。竜騎士部隊の最高司令官で、部隊結成より数々の戦果を我が物にした、言わばヴァルザニアの英雄である。

「うまい酒を飲ませる店があると聞いてやってきたのだが、ここは格闘場だったようだな」

セヴランは低い声でそう言ったが、決して脅しや威嚇のようなものではなく、穏やかで、悪戯の過ぎた子供を軽く諭すような口調だった。先の青年に比べると、背は低いががっちりとした体型をしており、鍛え上げられた筋肉が帷子の上からでも充分うかがえる。胸を張り、堂々と足を勧める姿はまさに最高司令官の名に恥じぬ貫録がある。

誰もが呆然とする中、一番に動いたのはジゼルだった。

「申し訳ございません。すぐに酒をご用意させていただきます！」

さあ、あんたたちも片付けておくれ」

ジゼルは周りの男たちに声を掛けた。こうなっては客も何も関係ない。セヴランと付き添いの背の高い男、クロードは空いた席に腰を下ろした。クロードは若いが腕の立つ男で、セヴランの片腕とも言える最高司令官補佐を務めていた。

あれほど暴れ回っていたアンナが憧れの男、セヴランの前ではどうしていいかわからず、その場にぼんやりと立ち尽くしていた。テーブルに置かれた酒にセヴランは手を伸ばし、喉を鳴らしてその味を楽しんだ。

「うむ。噂に違わぬ美酒」

「誠にございます」

クロードも目を細めた。微笑む二人の姿に安堵した他の客も、再びテーブルへ戻り、酒を飲み始めた。しかしアンナだけは未だ動けずにいた。セヴランがアンナに視線を送った。

「娘よ。なぜあれほど、息巻いておった？」

アンナは自分に声を掛けられていることにしばらく気が付かなかった。クロードが軽く人差し指でテーブルを叩くことで、アンナは我に返り、床に片膝をつき、右手を胸に充てた。

「私は……竜騎士になりとうございます」

その言葉で再び店中が静けさに包まれた。ジゼルはカウンターからその様子を心配そうな表情で見守っていた。

「残念ながら女は……」

口を挟んだクロードに対して、セヴランは軽く手を上げてその言葉を遮った。

「続けよ」

「幼少の頃より、その勇まし気姿に憧れ、いずれは自分もあの竜の背に乗ってヴァルザニアのために尽くしたい。そう思っております」

アンナの胸は高鳴っていた。ずっと心に秘めていたことを全て吐き出すつもりだった。

「その志を笑われ、蔑まれてしまい、辛抱堪らなくなったのでございます」

「なるほどのう」

セヴランは残りの酒を一気に飲み干した。

「しかし竜騎士たる者、常に冷静に行動できなくてはならぬ。怒りは平常心を失わせ、自らの命も、国そのものを滅ぼしてしまうことにもなり得る」

セヴランの言葉にアンナは項垂れるしかなかった。

「竜の背に跨り、力を自在に操ることは決して容易いことではない。」

そしてそのためには厳しい訓練に耐えねばならぬ。女だからとて容赦はせぬ」

アンナは顔を上げて力強く答えた。

「どのような厳しい訓練にも耐える覚悟はできております。それに……ヴァルザニアを愛し、慕い、守り抜いていきたいという気持ちに女も男も関係ございません」

セヴランはアンナの目の輝きを見て、優しく笑った。

「面白い。その覚悟に偽りがないか、試してやろう。着いて来るがよい」

セヴランが立ち上がると、クロードも慌ててそれに続いた。

「セヴラン様、いったい何を……」

「城へ帰る。クロードよ。その娘を馬に乗せてやれ」

いかにセヴランからの信頼が厚いクロードと言えど、その言葉に逆らうことはできなかった。未だ自体の飲み込めないアンナは膝をついたままだった。クロードがアンナに声を掛けた。

「どうした？ 来ないのか？」

「いつ、いいえ！ 行きます！」

アンナは慌てて立ち上がった。



セヴランとクロードに連れられ、アンナは城の中へと入ることを許された。もちろん、初めてのことである。甲冑を身に纏った兵士たちや召使いと思われる女たちはすれ違うと、彼らはセヴランとクロードに会釈をし、その後、必ずアンナを一瞥した。なりゆきでここへやってきたものの、アンナは、自分が場違いなところにいるような気分になっていた。

「クロードよ」

前に行くセヴランに呼ばれたクロードは歩調を速めてその横に並んだ。セヴランが何かを伝えると、クロードは「かしこまりました」

と答えて姿を消した。アンナにはセヴランの声を聞き取ることができなかった。

遠くから何か聞こえてくる。金属音……剣と剣がぶつかる音だ。「兵たちが訓練をしておるのだ」

そう言えば、掛け声のようなものも混じっている。

「竜騎士だけがこの国を守っておるのではない。歩兵部隊や騎馬隊など、それぞれが自らの役割を全うしようと腕を磨き、戦に備えている。地上を守ってくれる者がいるから自由に空を舞える。空を守る者がいるから自由に地を駆けることができる」

アンナにはセヴランの言っていることは理解できたが、なぜそんなことを話すのかはわからなかった。アンナの胸の内を読み取ったかのように、セヴランは付け加えた。

「志は皆、そなたと変わらぬということだ」

それはアンナに兵としての資格があると言いたかったのだろうか。あるいは「お前だけが特別ではない」ということなのか。

第一章 一三一

「ここは訓練場の一つだ」

セヴランが鉄の扉を開くと、太陽の光が目差した。辺りは高い城壁に囲まれており、一面に敷かれたレンガは、ところどころ欠けていたり、血と思われる赤茶色の染みが浮かんだりしている。アンナの目の前に、鍛えられた筋肉を脈動させ、武器を振るう兵士たちの姿が浮かんだ。

足元に黒い楕円形の何かが落ちていた。アンナはそれをそっと拾い上げ、掌に乗せてみた。表面はザラザラとしており、指先で叩くとカツカツという心地の良い音がする。セヴランが優しい微笑みを浮かべる。

「竜の鱗だ」

「鱗……これが……」

初めて触れる鱗の感触に、アンナは心躍らせていた。

「来たようだな」

空を見上げるセヴランに、アンナも倣った。

「あっ……」

アンナは思わず声を上げた。鎧を纏った兵を背中に乗せ、大きな翼で空を舞う竜の姿がそこにあった。アンナとセヴランの頭上を何度か旋回した後、竜はゆっくりと二人の前に降り立った。

実物の竜を目の前にし、アンナはしばし呆然としていた。思っていたより武骨で巨大、そして獰猛に見える。背中に乗った兵が竜の首の辺りを軽く叩くと、竜は前足を地につき、四つん這いになった。翼を折り畳み、長い首を下げて、そのままの姿勢で大人しくなった。その兵は竜の背中から降りると、兜を脱いで顔を晒した。クロードだった。

「どうだ？ 初めて近くで見る竜は？」

「あの……嬉しくて……うまく言葉が出てきません」

興奮し、体を僅かに震わせるアンナを見て、クロードは笑った。
セヴランがアンナに問う。

「娘よ。この竜に乗ってみるか？」

「えっ、あの……真にございますか？」

「うむ。乗ってみよ」

「はっ、はい！」

激しく伸縮と膨張を繰り返す心臓を押さえながら、アンナは竜の横腹のほうからそっと背中に跨った。手綱を取ろうと手を伸ばした瞬間、竜が勢いよく立ち上がった。アンナは後ろ向きに転げ落ち、尻もちをついた。驚きで目を瞬かせている。

クロードが諭すように首を撫でると、竜は再び四つん這いになった。

アンナは先程と同じ要領で竜の背に乗ったが、再び振り落とされた。それならばと、アンナは素早く飛び乗って、立ち上がるより先に手綱を掴むことに成功した。

（やった！）

驚いた竜は立ち上がって首を振り、体を激しくくねらせながら奇声を上げる。アンナも今度こそは振り落とされまいと、手綱をギュッと握る。

「ドー、ドー！」

竜を落ち着かせようとして見たが、むしろ抵抗は強くなった。最後には体全体を使って、アンナを弾き飛ばすような形になった。

全身を地面に打ち付けたアンナは堪らず呻き声を上げた。腰を摩りながら起き上り、もう一度挑戦しようとする、沈黙が続いていたクロードが口を開いた。

「竜はプライドの高い生き物だ。己の認めた者にしかその背中を預けん。ましてや馬と同等の扱いをする者や自分を恐れる者には絶対に心を許さぬ」

「恐れる者……」

クロードの言葉を聞いたアンナは、竜の背に跨るのを止めた。静

かに竜の正面へと回り、身構えることはせず、自然体で竜と対峙した。

竜は長い首を高く振り上げて口を開き、牙を光らせた。声を荒げて威嚇されても、アンナは落ち着いた様子で怯えることもなかった。食らいつかんばかりの勢いでその顔を近づけられても、やはり微動だにしなかった。竜は獲物を狙うように、アンナの体を四方八方から見据えていたが、しばらくすると口を閉じ、威嚇するのを止めた。アンナの右手が竜の首を這う。ゴツゴツとした感触が指に伝わってくる。竜は何の抵抗もしない。

「お願い。私を乗せて」

アンナが優しく囁くと、竜は身を沈めて首を下げ、背中に騎士を迎える態勢を整えた。アンナが跨っても、姿勢を崩さず、彼女を振り落とそうと激しく暴れることはしなくなった。アンナはそっと手綱を握り、竜に声を掛ける。

「飛んで」

竜が後ろ足でゆっくりと立ち上がった。首は下げたまま、静かに二枚の翼を羽ばたかせる。そこに少しずつ速さと力強さが加わってゆく。アンナを乗せた竜の体がふわりと宙に浮き、そのまま遥か上空まで昇った。小さくなったセヴランとクロードを見て、アンナは歓喜の声を上げた。

「飛んでる！」

竜が翼を広げ、ヒュッと風を切るように真っ直ぐに飛び始めた。そのまま城壁のそばまで行くと、くるりと身を翻して方向転換をした。それは全てアンナの意思だった。もはや言葉にせずとも竜はアンナの思うがままに動くようになっていたのだ。

セヴランとクロードは旋回する竜を驚きと共に見守っていた。

「このような短い時間であそこまで……」

クロードが上げる称賛の声に、セヴランは黙って頷いた。

竜と共に空を舞うアンナを見ていたのは、セヴランとクロードだ

けではなかった

「叔父上、ご覧ください」

空を指差して声を弾ませているのは、王の息子、アデル王子であった。

「どうなされた？」

アデルに促され、ラウルもバルコニーへと歩み出た。

王だけでなく、最高齢の大臣であったディムが亡くなった現在、ヴァルザニアの政は、王子であるアデルと王の実弟であるラウルが主となって行われていた。ラウルはまだ幼いアデルの補佐役とされていたが、実際に政の実権を握っているのは彼であった。

「少女が竜に乗っておるのです」

「なっ、なんと……」

ラウルは自らの目を疑った。竜に跨ることを許されるのは、男だけだと思っていたが、アデルの言葉通り、確かに少女を乗せた竜が空を飛んでいる。

「セヴラン殿か、あのような勝手なことを許すのは……」

ラウルは小言を口にしたが、アデルはかつて見たことのない光景を楽しんでいた。

名残惜しさを捨てきれぬまま、アンナはゆっくりと空から降りるよう、竜に意志を伝えた。

着地した竜の背中より降りたアンナにクロードが尋ねた。

「どうであった？」

「はい。とても楽しかったです」

「そうであろうな」

語らずとも、その表情を見れば、アンナがどれほど満足しているかがよくわかる。クロードに変わり、セヴランがアンナに問う。

「娘よ。名は何と申す？」

アンナは緩んだ顔を締め直した。

「アンナと申します」

「アンナか……歳はいくつか？」

「十三でございます」

「では、アンナ。十五になったとき、また来るが良い。そなたに竜騎士への道へ踏み込むことを許そう」

「まっ、真にございますか！」

再びアンナの口元が綻んだ。しかしセヴランの表情は険しい。

「但し、入隊試験は他の者と同様に挑んでもらうぞ。私はそのための資格を与えたただけだ」

セヴランは冷たく言い放ったが、アンナはそれにも留めなかった。

「ありがとうございます！ それだけで充分にございます」

変わらぬアンナの決意に、セヴランは優しく微笑んだ。

アンナが去ると、クロードが抱いていた疑問をセヴランにぶつけた。

「良いのですか？」

「クロードよ。そなた、あそこまで竜を扱うのにどのくらいの時を要した？」

「跨るのに丸一日、自由に空を舞うのに一週間ほどだったかと……」
セヴランはちらりとクロードを見て、ニヤリと笑った。

「では何も拒む理由はあるまい」

第二章 一 一

東の空がぼんやり明るくなり始めた頃、ヴァルザニアの竜騎士部隊の一部がコルドを目指して飛び立った。先行している地上部隊への増援が目的である。

その中の一つであるエリック隊にはアンナがいた。十五歳になった彼女は入隊試験に見事合格し、厳しい訓練を経て同隊に配属となった。今や第一線で活躍する立派な竜騎士の一人と言える。アンナは女性初の竜騎士となったが、その後は彼女に続いて二人の女竜騎士が誕生した。

アンナが初めて竜の背中に跨ってから五年。ヴァルザニアと近隣諸国との情勢は大きく変わり始めていた。

この度の攻撃は、コルドの裏切りに端を発したと兵士たちは聞かされている。

「裏切りですか？」

アンナが隊長エリックの言葉をそのまま返した。作戦の意義を知りたかったのである。

「そう。コルドと我々、ヴァルザニアが友好条約を結んでいるのはそなたも知っておろう？」

「はい。領土の一部に我が軍の兵を駐留させているのは、条約上の決まりごとだと」

「そうだ。但し、カザールやプロメキアに対し、あくまでコルド軍と共同で防衛線を張るという軍事的な意味のみで、政治的な意味はないがな」

「裏切ったというのは、攻撃をしてきたということですか？」

「いや、そうではない。コルドがプロメキアと手を結ぶために動いているという話だ」

「えっ、なぜですか？」

アンナの問いかけに対して、エリックは静かに首を振り、僅かに厳しい口調で答えた。

「そこまでは私にもわからん。しかしどんな理由があらうと、命令とあれば従うしかない」

エリックはアンナより十歳年上の二十八歳。竜騎士部隊の隊長としては若いほうに入るが、指揮官としての貫禄や部下から得る信頼は充分にあった。

「アンナよ……」

「はい」

「そんなことを尋ねてくるのはお前だけだぞ。戦いに私情は持ち込まんことだ。思わぬところで命を落とすことにもなり得る。そのことはよく憶えておくのだな」

『兵は戦う理由を知らなくて良い』

本当にそうだろうか。

アンナもこれまで幾度となく実戦を経験してきた。しかしそこにははつきりとした理由が見えていた。ヴァルザニアへ侵攻してきた敵を退ける、つまりは侵略者より祖国を守るためだ。

しかし今回は少し違う。確かにコルドとプロメキアが手を結ぶのを防ぐのは結果的に祖国の防衛に繋がるのかもしれない。ただ異国に兵を出し、戦をしなくてはならない遂げられぬようなことなのか。

アンナにはわからなかった。

◇ ◇ ◇

大勢の兵たちがぶつかり合い、倒れていく様が、空を舞う竜の背中からはよく見えていた。

エリックが叫ぶ。

「ローランとシリルは上空待機。それ以外の者は先行部隊に加勢する！ 降下せよ！」

エリックの竜がコルド軍に向かって降下を始めると、部下たちも雄叫びと共にそれに続いた。

空より一斉に舞い降りてきた竜騎士部隊にコルド軍は圧倒された。大砲で撃ち落とそうにも、弾玉を装填している時間より、竜の動きのほうが遥かに俊敏であった。

地上へ降り立った竜は長い尾を振り、翼をはばたかせてコルドの兵たちを弾き飛ばす。口から吐き出す炎は主に威嚇として使われた。

「敵を全滅させることなく、降伏させるのが目的」と命令を受けていたからだ。

竜騎士の武器は槍、長剣、短剣がそれぞれ一本ずつ。堅い鱗に覆われた竜に跨っていることは、重戦車に乗っているようなものだが、竜騎士が纏っている鎧そのものは軽いがゆえに薄く、防御力は低い。つまり鞍より落下してしまうことは命取りにもなり得る。

駐留部隊と先行部隊、それに加えて追撃部隊の参戦。これだけの大部隊を送り込む理由は、早期決着にあった。加勢するプロメキア軍が到着する前にコルド軍を倒してしまおうというのである。

果たして作戦は成功し、コルド軍は早々に降伏した。プロメキア軍はコルドの国境で進軍を中断する形となった。



「乾杯！」

ヴァルザニアの兵たちは勝利の美酒に酔いしれていた。今宵の盛り上がりようはいつも以上である。なぜならこの勝利は歴史的にも大きな意味を持つものだからである。

「これでコルドの領地は全て我々ヴァルザニアのものとなったな」
誰かの声で皆が湧いた。

「つまりカザール、プロメキアをも凌ぐかも知れぬ大国ってわけだ！」

拍手が巻き起こる。再び杯をぶつけ合う音が鳴り響く。

兵たちの言葉通り、今後、コルドは完全にヴァルザニアの統治下に置かれることになる。

軍はヴァルザニア軍に組み込まれ、指揮権は失われる。

王族は城を追われ、コルド地区という小さな地域の主導者に留められてしまい、政に関する権利はゼロに等しくなる。

また王族の一部と軍上層部の者は、友好条約違反の首謀者として、投獄あるいは死刑となる。

居酒屋の娘であるアンナにとって、宴は楽しいものだった。しかし今日ばかりは騒ぐ気になれず、皆から離れて部屋の隅に座り、静かに酒を啜っていた。

「どうしたのだ？ アンナ」

エリックだ。

「向こうへ行って皆と騒がぬのか？」

「はい。何だか気が乗らなくて……」

声が沈んでいる。

「思うところがあるのなら申してみよ」

その口調は決して威圧的ではなく、兄のような優しさに満ちたものだった。そのため、アンナも素直に胸の内を話す気になった。

「コルドは……なぜ友好条約を破ったのでしょうか？」

アンナの言葉を聞き、エリックが呆れたように溜息を付いた。

「またその話か……アンナよ。我々兵士の使命は何か？」

「使命は……ヴァルザニアを守ることです」

「何から守る？」

「何から……ヴァルザニアの平和を脅かす者からです」

それがエリックの望む答えであるかはわからないが、アンナは自らの意思を言葉にした。エリックは険しい顔で一つ頷いた。

「ヴァルザニアの平和を脅かす者、即ちそれが敵だ。敵と見なせば戦うのが我々の使命だ。敵が敵である理由を知る必要はない」

「しかし……」

アンナは言葉を詰まらせた。

「構わん。申してみよ」

「戦をせずに話し合いで済むことはございませんでしょうか？ あ
るいは進軍せずとも攻めてくるのを迎え撃つという方法も……」

「アンナ」

勢いに乗って喋るアンナをエリックが制した。

「話し合いはもっと偉い方たちのすることだ。それに次の一手を待
つてくれる敵などおらんぞ。コルドとプロメキアが手を結び、一氣
に攻めてくれば、滅びたのは我々ヴァルザニアのほうだったのかも
しれんのだぞ」

アンナは黙り込み、下を向いた。エリックの言っていることが正
しいと感じたからだ。エリックもそれ以上は何も言わず、酒の席へ
戻った。アンナの気分は優れぬままだった。

第二章 一 二

コルド軍が沈黙して十日余りが過ぎた頃、ヴァルザニアの王子アデルと参謀のラウルがコルド地区に到着した。旧コルドのこれからについて、王族と話し合い、市民の前で調印を行うためである。

調印式当日。ヴァルザニア兵たちの厳重な警備の元、コルド城周辺に市民たちが集められた。演説のため、ラウルが城のバルコニーの先端へと進み出た。

市民たちはそれをじっと見つめる。彼らは今、胸の内に何を秘めているのか。警備の列に並んだアンナは答えの出ぬ疑問を抱いていた。

ラウルが群衆に向かって大声を轟かせた。

「旧コルド国民よ。私はヴァルザニア国の参謀ラウルである。今は亡き王に……」

ラウルが勢いに乗り始めた頃だった。どこからか一本の矢が放たれ、シュツという鋭い音を立てて彼の耳元を掠めた。それを合図にして、前のほうに並んでいた者たちが、隠し持っていた石を投げ始めた。そして先程までは抵抗の意思などまるで持ち合わせていなかったような者たちまでもが、ヴァルザニアの兵たちに襲いかかった。アデルとラウルは城の中へと避難したが、「引っ込め！」や「出ていけ！」といった罵声と共に投石は続く。警備に当たっていたヴァルザニアの兵たちが暴動を鎮めるために動き出した。

予想外の展開にアンナはしばし呆然としていた。喧騒の中より誰かが彼女を呼ぶ。

「アンナ、何をしている！」

「はっ」

我に返ったアンナは暴れる一人の男を後ろから羽交い締めにした。男は右へ、左へと体を激しく揺さぶり、アンナから逃れようとする。

「離せ！ この侵略者め」

その言葉に思わずアンナの腕の力が抜けた。男は素早く身を翻してアンナと向き合った。

「私は侵略者などではありません」

「人の家に入り込んで好き放題やっておいて何を言うか！」

男の拳がアンナの腹に直撃した。しかし呻き声を挙げたのは男のほうだった。鎖帷子に対して素手では歩が悪過ぎたようだ。

「私は……侵略者などではない！」

アンナはもう一度そう叫び、手を抱えてうずくまる男の後頭部を殴って気絶させた。

「この野郎！」

別の男がアンナに殴りかかってきた。アンナは素早く身を屈めてそれを交わすと、男の鳩尾に拳を叩き込んだ。男は「うげっ」と声にならぬ声を出して地面にひれ伏した。

（懐かしい）

アンナは居酒屋時代によくやった乱闘騒ぎを思い出した。

（母さんは元気だろうか）

今はそんな場合ではないとわかっているが、母であるジゼルが顔が頭に浮かび、笑みが零れた。

暴動は無事に鎮圧されたが、式は中止となり、調印は王族と一部の人間の身で行われることとなった。



「新たな任務が下された」

神妙に告げるエリックの顔を見て、誰かが吹き出した。それをきっかけに他の者も笑い始めた。

「何が可笑しい？」

「隊長、そんな痣だらけの顔で言われたって締まらないぜ」

「ふん。お前たちだっていい勝負だ」

暴動の鎮圧に参加した者は皆、同じように顔に痣を作っていた。

アンナもクスクスと笑ったが、彼女の顔も例外なく痣だらけだった。

エリックは真剣な表情に戻り、話を続けた。

「アデル王子とラウル参謀が旧コルド各地を遊説することに決まった。しかし本日の暴動で、国民たちが我々に対して如何に反感を抱いているかを諸君も理解してくれたと思う」

アンナの頭の中に見知らぬ男に投げかけられた「侵略者」という言葉が蘇った。

「旧コルド軍の兵の中には未だ投降せず、どこかに身を潜めている者もいると聞く。従順な国民であっても、もし連中が反逆に動けばそれに続くだろう。そこで我々の出番だ」

先程までの穏やかだったムードは一変し、皆の目つきが変わった。「遊説に先立ち、我々が残党狩りをやる」

エリックが左の掌に右拳をぶつけた。パチンと心地良い音がした。

「我々はブリス隊と共に、このコルド地区より東へ向かう。他へは別の隊が当たる。出発は明後日の日の出前とする」

「よし！ 綺麗さっぱり掃除してやろうぜ」

「おうよ！」

皆が力瘤を見せ合い、息巻いている中、アンナだけは残党が戦を避けて、大人しく投降していることを望んでいた。かつてエリックに言われた「命令とあれば従うしかない」という言葉が頭を過った。「但し、ジェリルマン、ローラン、ルイ、そしてアンナには別行動を取ってもらう」

アンナを含めて名前を呼ばれた四人はお互いの顔を見合わせた。

◇ ◇ ◇

四頭の竜が舞う大空の下、大地を蹴る馬の蹄の音が轟音となって木霊する。馬には物々しい鎧を纏った体格の良い男たちが乗っており、中央を走る馬車を守っていた。

「あーあ、俺も残党狩りのほうに加わりたかったな」

そう言っただけを尖らせたのは、竜騎士部隊の中では最年少の十七歳であるルイだった。

「何言ってるの。こんな任務につけるなんて光栄なことじゃない」

「まあ、そりゃそうだけど……」

ジェリルマン、ローラン、ルイ、アンナの四人は残党狩りではなく、親衛隊と共に、アデル王子とラウル参謀の護衛を命じられたのである。

「護衛なんて退屈なだけだよ。残党狩りが終わったところへ行くんだろ？ 戦になることはまずないだろうしさ」

この任務に就いたときから、ルイは終始不満を漏らしていた。

「滅多なことを言うもんじゃないぞ。ルイ」

少し厳しい口調でルイを睥睨したのは、この度の別行動の指揮をエリックより任されたジェリルマンだった。

「もし王子やラウル様の身に何かあったときは我々の責任となるのだぞ」

「……申し訳ありません」

思った以上にルイが意気消沈してしまったからだろうか。ジェリルマンが優しく笑って付け足した。

「それに戦はないに越したことはないのだからな」

その言葉を聞き、アンナも微笑んだ。エリックがこの任務に私を選んだのは、戦に迷いを抱く自分に対する心配りだと、彼女は感じていた。

第二章 一三一

コルド地区より北に位置するドリユクの街。大広場に市民を集め、ラウルの演説が行われた。調印式にあった殺気だった雰囲気は消え失せていた。

ただそれと同時に人々は目の輝きもなくしていた。誰もが下を向き、失望と疲弊に満ちた表情を浮かべ、人形のように列を作り、ただ並んでいるだけに見えた。

「ドリユフの街の人々よ。我々はここへ再び戦をしに来たわけでもなく、そなたたちを支配しに来たわけでもない」

ラウルの言葉を聞き、顔を上げた者がいた。

「我々、ヴァルザニアはコルド、ガザール、プロメキアの三大国に囲まれ、常に支配に怯える立場にあった。此度の戦に勝利し、立場が変わったからとて、そなたたちに同じ恐怖を与えるつもりは毛頭ない。むしろ、そうあってはならぬと考えておる。

我々の望みはもっと大きなもの、コルド、ガザール、プロメキア、そしてヴァルザニアの四つの国が一つになり、皆が支え合い、助け合い、全ての人々に平等に自由と平和、豊かな暮らしが与えられる……そんな国を作っていきたい。それがあそこにおられるアデル王子を始めとするヴァルザニアの望みである！」

人々の目が一斉にアデルのほうへ向いた。アデルはまるで物怖じせず、実に堂々としたものであった。

「しかしこれを快く思っていない者がおる。プロメキアとガザールである。ヴァルザニアとコルドは友好条約を結んでいたことは、そなたたちも承知のことと思う。であるにも関わらず、なぜ此度のような戦は起きたのか」

このことに最も好奇心を刺激されたのはアンナだった。ずっと知りたかったことだ。

「プロメキア王がコルド王を惑わせ、狂気に走らせたのだ！」

ラウルの語気が強くなると同時に、人々も騒ぎ始めた。

「何だって！」

「それではプロメキア王のせいで、我々の仲間は死んだと言うのか！」

「そんな馬鹿な……」

誰もが興奮し、自らの思いを余すことなく口にした。ラウルが両手を広げ、人々を沈める。

「ヴァルザニアを食い物にしようとしていた者たちが考えることだ。彼らの抱くのは支配のみ。コルドを利用するつもりだったのである。そしてプロメキアと手を結ぶガザールと同じ。その思想に輝かしい未来など約束されてはおらぬ」

人々の目が血走り、殺気が漂い始めた。物々しい空気の中、ラウルの言葉は続く。

「我々は戦など望んではおらぬ。しかし今は戦わねばならぬときである。理想国家の実現という信念を持ってすれば、必ずや勝利を得ることができる。一時の苦しみと悲しみを乗り越えれば、永遠とも言える至福のときがやって来る。あの紋章を見よ！」

ラウルの指差す方向には、勇ましい竜の姿が描かれたヴァルザニアの国旗が風に揺れている。

「我々には竜の神がついておる。醜き共食いを忌み嫌う神は必ずや我々に力添えをして下さるであろう。恐れることはない。理想国家実現のために闘うことを誓う者を神が見捨てるはずはない」

「俺は戦うぞ！」

誰かが声を上げ、拳を振り上げると、「俺もだ！」「俺も戦う！」と、いくつもの拳が天に向かって突き上げられた。いつまでも止まぬ歓声と共に異様な空気が大広場を包んでいった。



暗闇の中、忍び寄る気配に気が付き、アンナは閉じていた目をぱ

つと見開いた。素早く立ち上がって、剣の柄を握り、いつでも抜ける態勢を整えた。夜とは言え、見張りにつくときに熟睡することはない。神経と警戒心を研ぎ澄まし、微かな変化でさえ見逃さぬよう訓練を受けている。

「お騒がせしたようですね」

若い男の声だ。敵意は感じられない。月灯りにぼんやりと照らされ、相手の顔が浮かんだ。その瞬間、アンナは剣から手を離して慌てて膝をつき、右手を胸の前に当てた。

「……アデル様」

「畏まらなくても良いのです。楽にして下さい」

「しかし……」

「良いのです」

アデルの優しい表情を見て、アンナは力を抜いてゆっくりと立ち上がった。

「アデル様、何故お一人でこちらへ？」

「眠れなかったので、部屋から抜け出してきたのです」

「抜け出すと言っても、扉の外には見張りの者がいるはず」

「扉からではなく、窓から出てきましたから」

「窓？　しかしアデル様のお部屋は二階のはずでは……」

「壁に張り巡らされた蔦を辿って降りて来たのです」

「何と危険なことを……」

アンナが目丸くすると、アデルが声を上げて笑った。

「大丈夫、私にもその程度のことはできます」

人懐っこいその笑顔に、アンナはそっと胸を撫で下ろした。そして思わず笑みが零れた。

「私の方こそ、アンナさんを起こしてしまったようで申し訳ない」

「完全に眠っていたわけではありません。それでは見張りになりませんから。そんなことより、なぜ私の名を？」

王子であるアデルに自らの名を知られているなど、アンナには思っても見ないことだった。

「あなたはセヴラン殿と同じくらい有名ですからね。初めて女性で竜騎士になった方。アンナさんのことを知らぬものはヴァルザニアにはおりません」

アンナはどこか気恥しくなり、下を向いた。喜んで良いのか、悪いのかどちらともつかず、戸惑わずにはいられなかった。

「少し座りませんか？」

そう言ってアデルはそばにある小さな平坦な石の上に腰を下ろした。アンナもそれに倣い、アデルからは少し離れて、大きな岩に背中を預けて座った。

「今、竜はどこにいるのです？」

「それはわからないのです」

「わからない？」

アデルが不思議そうな顔をする。

「はい。彼らにも休養は必要ですから。任務のないときは自由にさせております」

「しかしいざというときに戻って来ないことも考えられるのでは？」

「それはございません。心に念じれば、必ず戻ってまいります」

「随分と信頼しているんですね」

「はい。信頼がなければ、お互いに命を預けることなどできませんから」

アデルが静かに目を細める。

「あなたの竜、名は何と？」

「カイルと申します」

「カイル……素敵な名だ。竜の背に乗って空を舞うのはどのような気分ですか？」

「最高にございます。重力から解放たれ、どこまでも限りなく続く大空を飛んでいると、まるで自分自身に翼があるような、そんな錯覚に陥ることがあります」

アンナは興奮で身を乗り出していた。目の前にいるのが王子であることをすぐに思い出し、慌てて元の姿勢に戻った。アデルはその

様子を見て微笑んだ。

「そして、それが戦のためでなければ、言うことはございません」

アンナは一変して寂しげな表情を浮かべた。暗闇の中でもアデルはその変化を感じ取っていた。声も沈んでいたからだ。

「アンナさん、叔父上の思想をどのように思われますか？」

「思想？ 理想国家のことでしょうか？」

「そうです」

第二章 一四一

「私は……それについて言及できるような立場にはございません」
そう言って、アンナは下を向いた。裏を返せば言いたいことがあるという意味だと、アデルは解釈した。

「私には国民を正しき方向に導いていかなばならぬ義務があるので
す。一国民としてのあなたの意見をお聞きしたいのです」

アデルがそう言っても、アンナには「はい。それならば」と言い
出すことはできなかった。

「このことであなただをどうしようと言うわけではありません。あ
なたが本当にヴァルザニアを愛しているならば、国のためだと思っ
てお話し下さい」

そこまで言われれば、アンナとしても口を開かぬわけにはいかな
かった。

「では、恐れながら……ラウル様の目指す、全ての人々が平等に平
和と自由を享受できる国造り、素晴らしいことと思います。ただ……」

「ただ……なんです？」

アンナはそれ以上続けることを躊躇したが、アデルの優しい目を
見て、再び言葉を紡ぎ始めた。

「理想国家に辿り着くために、果たしてどれだけの命が失われなけ
ればならないのか……そんな疑問が拭いきれないのです」

アデルは静かに頷いた。

「私も似たようなことを考えているのです。戦には必ず何らかの犠
牲が付きものです。大切な人を失った者たちの苦しみや悲しみが戦
そのものに向き、平和な世界を望む気持ちに繋がれば良いのです。
しかしその矛先がヴァルザニアに向く可能性も否定できないのです。
そうになると、我々は再び戦への道を歩むことになるでしょう。結局、
戦では戦のない世界を作ることなどできないのかもしれないかもしれせん」

「アデル様はどのようにするべきだとお考えですか？」

「私は四つの国を一つにまとめることには賛成です。ただし、叔父上が仰るように体制をまとめるのではなく、思想をまとめて四つの国が同じ方向を向くべきだと思うのです。そのために必要なのは戦ではなく、話し合いの場ではないかと」

アデルの考えが自分の考えと同じだと知ったアンナは興奮して彼に期待を寄せた。

「アデル様はご自身のお考えをラウル様にお話しにならないのですか？」

アデルは苦笑し、首を横に振った。

「話しましたが、『お前は甘い』と叱られてしまいました」

「そんな……」

「叔父上は『先んずれば人を制す』という言葉を誰よりも信条としておられますから。誠に元軍人らしい考え方です」

「ラウル様が元軍人？」

「はい。祖父が王だった頃、叔父上は若くして親衛隊の長を勤める、実に勇敢な兵だったそうです」

「そうだったのですか」

「少なくとも、叔父上は叔父上の考え方をお持ちで、ヴァルザニアを良い方向へ導こうとしていることに間違いはありません。それを真っ向から否定することなど私にはできません」

曇りのない顔で話すアデルを見れば、彼がラウルを信頼していることがアンナにも伝わって来る。

「叔父上の方法が良い結果を生むのか、あるいは悪い結果を生むのか、それを知るのは神だけなのかもしれませんね」

アデルとアンナの頭上を、月灯りに照らされて一頭の竜が舞っていた。



アデルとラウルの遊説が続く中、ヴァルザニアでは早くもプロメキアとの戦の準備が整いつつあった。勝利の勢いにそのまま乗ってしまおうというのがラウルの考えである。時を置き、厭戦気分が高まる可能性を恐れたからだ。

まず狙うは国境沿いに位置する『メキド』。「第二の首都」と呼ばれるほどプロメキアでは栄えており、あらゆる方面より人々が集い、物資が多く備えられている。

占領後、戦の拠点として利用するには申し分のない場所である。

「ジャコブ様、ヴァルザニアの軍勢がこちらに向かっているのとこのです」

「ほう。いよいよ動き出したか」

メキドはプロメキア王の実弟であるジャコブの納める街であり、その中には彼の居城も存在していた。

「ふん。ヴァルザニアごとき小国がコルドを落としたからと増長しておって……」

「しかしヴァルザニアの竜騎士部隊はかなり手強いと聞きます」

「恐れるに足らぬわ。プロメキアの技術力の高さを見せつけてやれば良い。奴らを迎え撃つ準備に取り掛かれ！」

「ハッ。ただちに！」

部下が下がると、ジャコブはバルコニーへ出て、メキドの街を見渡した。

「父上と兄上より預かり遣ったこの街、易々と譲り渡してなるものか」

ジャコブには断固たる覚悟と、ヴァルザニアに勝つ絶対の自信があった。



ヴァルザニア軍勢はメキドの街まで僅かのところにまで迫った。

一人の兵が思わず声を上げた。

「あれが……」

それを合図に他の兵たちも一斉にどよめき始めた。

「メキドの壁……」

プロメキアは武器、建造物の製造技術に優れた国である。『メキドの壁』はその象徴とも言える存在だった。

天に向かってそびえ立つ分厚いレンガ造の壁。高さは三十尺（約9m）を超える。ところどころが開口されており、連射砲台が外へ向かって牙を向いている。連射砲台とは従来の大砲を小型化する代わりに、回転式の弾倉を採用し、装填から発射時間を短縮化したものである。

この防御と攻撃が一体になった最強の番人を破壊しない限り、ヴァルザニア軍は街の中へ侵攻することができないのである。

「奴ら、この壁に恐れおののき、立ち往生しているようです」

メキドの壁の頂きに据え付けられた指令台より、ヴァルザニアの様子を窺っていた兵が、傍らに立つメキド方面軍隊長のパトリスに得意げに報告した。

「仮に進軍してくるようなら、連射砲台の餌食にしてやりましょう」

「竜騎士部隊の姿は見えんのか？」

「はっ……今のところは……しかし、このメキドも随分と甘く見られたものでございますな」

兵が高笑いをして、パトリスは神妙な顔つきを崩さなかった。

竜騎士部隊は必ず来ると考えていたからだ。

本隊とは別の動きをしているのか。

空より飛来する竜騎士部隊にメキドの壁が如何ほどの役に立つのか。

答えの出ない疑問をパトリスは頭の中で繰り返していた。

「砲台の発射準備だけ抜かりのないように進めておけ」

今の彼に言えるのはそれだけだった。

第二章 一五

ヴァルザニア軍とプロメキア軍、双方が動かぬまま、しばしの時が流れた。

「どうか？」

「いいえ。依然として動きがありません」

「ええい、どういふことなのか！」

ヴァルザニアの軍勢を確認してからかなりの時間が経過したが、彼らはメキドの壁の遥か遠方で待機したまま、一向に動く気配を見せない。

「やはり怖気づいているだけなのでは？」

「それならばならばなぜ後退せんのだ」

パトリスの苛立ちは募り始めていた。

「こちらから撃って威嚇しますか？」

「そんなことをして何になる？ 無駄はやめよ。私はジャコブ様の元へ行く。動きがあれば直ちに報告せよ」

パトリスが見張りの兵に背を向けた瞬間だった。

「うわっ！ パッ、パトリス様！」

「何事か？」

振り返った瞬間、パトリスも言葉を失った。さきほどまで何もなかったそこに、巨大な竜の姿があったからだ。翼を羽ばたかせ、青い目で二人を見ていた。

「うっ、撃て！」

パトリスはどうか絞り出した声でそう叫んだが、真上にいる敵に向かって大砲を撃てるはずもない。竜の背中に跨る騎士が槍をが繰り出し、見張りの兵を突き刺した。

「おっ、おのれ！」

パトリスは素早く剣を抜き、応戦の態勢を整えたが、頭上より別の竜騎士たちが飛来した。あっという間に背後を取られてしまった

パトリスは、あえなく槍の餌食となった。

竜騎士部隊はメキドの壁の遙か上空、雲の上を駆け抜け、街の真上より侵入する作戦に打って出たのである。例え連射砲台と言えども、真上より侵入する敵に関してはまるで無力であった。

砲撃手たちは次々に竜騎士に倒され、全滅した。これで地上部隊も砲撃に恐れることはない。竜騎士の一人がヴァルザニアの国旗をメキドの壁に立てた。それを合図に、地上部隊は街の門に向けて馬を走らせた。

地上へ降り立った竜騎士たちに、次はプロメキアの守備隊が襲いかかった。コルド戦と同じく、竜たちは尾や翼を使って敵を弾き飛ばし、炎は威嚇に使うという戦法に出た。

一部の者は竜の背より降り、鉄の門を開けるほうへ回る。地上部隊の進路を作るためである。誰かの掛け声で全身に力を入れる。ギィギィと音が立つのと同時に、外から熱気が入りこんでくる。

「地上部隊が門を潜れば、勝利を疑う由はない」

ヴァルザニアの兵たちは誰もがそう考えていた。しかしその確信を打ち壊すことが起きた。心地良く何かが弾けるような高い音が鳴ったかと思うと、風を切り裂くような鋭い音が続いた。「ウツ！」と言う呻き声と共に一人の兵士が倒れた。

いったい何が起きたのか……ヴァルザニア兵の中でそれを理解している者は一人としていなかった。そして理解する間もなく、再び鳴り響く高い音と鋭い音、平伏す兵士……。

「なっ、何だ！ あれは！」

ヴァルザニア兵たちはこれまで見たことのない異様な光景を目にした。プロメキア兵たちが長い筒状のものを手にし、自分たちに向けているのだ。

パン！ という微かに間の抜けたような高い音と共に、筒が火を吹く。シュッ

という鋭い音を聞くと同時に、体のどこかに激しい痛みが走る。

「馬鹿な！ 魔術とでも言うのか！」

プロメキアにそのようなものが存在すると囁かれたことは一度としてない。勝利を確信していたヴァルザニア兵たちが動揺し始めた。プロメキア兵の一人が高らかに笑う。

「恐れ入ったか！ あれこそ我らが発明した『銃』と呼ぶものよ」

「銃だ！」

『銃』という得体の知れぬものがヴァルザニア兵たちを怯えさせた。その軟弱ぶりを隊長であるブリスが一喝した。

「うろたえるな！ 門を開け！ 地上部隊を導き、一気に片を付けてやれば良い。他の者は魔術師共を蹴散らせ！」

隊長であるブリスが叫ぶ。銃が火を噴くためには、僅かに時間が掛かる。その隙に竜騎士たちは間合いを詰める。そして竜に対しては、銃という魔術も効き目がなかった。鱗の当たりでキンツという心地良い音が鳴るだけで、ビクともしない。

「なっ、何という堅い鱗だ……鉛の玉でさえ跳ね返すというのか……」

つまり銃というのは魔術の類ではなく、火力を使い、高速で鉛の玉を打ち出す武器のことである。竜の偉大さを確信した竜騎士たちは再び勢いに乗り始めた。

「やはり我々には竜の神が付いておられる。銃など恐れるに足らぬ！」

一方のプロメキア兵も怯みはしなかった。

「鞍の上の騎士を狙え！ 奴らの甲冑は薄い。銃なら一撃だ！」

激しい攻防戦となった。結成以来、これほど竜騎士を苦しめた者は他になかったであろう。

やがて門は開かれた。外で待機していたヴァルザニアの地上部隊が雪崩れ込んできた。戦はヴァルザニア優勢で展開し始めた。

自らの居城に身を置いていたジャコブの元に一人の兵が駆け付けた。

「ジャコブ様、ヴァルザニアの軍勢が街の大部分を飲み込もうとしております。我々が時間を稼ぎます故、早々に撤退の御準備を！」
「そのようなことができるわけがなからう！ 例え一人になろうとも、ここは私が守り抜いて見せるわ！」

ジャコブは兜を被り、椅子に腰を下ろした。

「申し訳ございません」

「容易く撤退などという言葉を口にするではない。直ちに配置に戻れ。良いな」

「ハッ！」

部下が下がるのを見届けて、ジャコブは一人苦笑した。

「我らが技術力も、神の遣いたる竜には通用せぬか……」

バルコニーより入る風が轟音と共に青いカーテンを激しく揺らし始めた。

「来たか……」

ジャコブは吹き飛ばされそうになるのをグッと堪えて、椅子より立ち上がった。窓の外に向かって睨みを利かせ、自らの闘志に疑いがないことを示す。

ゆっくりと降下してきた漆黒の竜がバルコニーの外側で翼を羽ばたかせている。背中に跨る騎士が口を開いた。

「我はヴァルザニア軍竜騎士部隊最高司令官補佐クロード、貴殿がプロメキア軍メキド方面総司令官ジャコブ殿に間違いあるまいか？」

「如何にも、我がジャコブである」

第二章 一六一

「戦の行く末はもはや明らか、これ以上の犠牲を出さぬためにも降伏されよ」

クロードの言葉に、ジャコブの形相が恐ろしいものへと変わった。剣を抜き、クロードに向ける。

「それは我らに対する侮辱か？ プロメキアの武人たちは、例え一人になろうとも命尽きるまで戦い抜く覚悟はできておる。貴様も騎士ならば、鞍より降りて我と剣を交えよ！」

クロードは竜の背から、バルコニーへと飛び移った。ジャコブのほうへ歩み寄り、長剣を抜いた。

「騎士の誇りを持って、存分にお相手いたそう」

ジャコブはふつと軽く笑うと、剣を鞘に戻し、兜と鎧を脱ぎ始めた。クロードには理解しがたい光景であった。

「何の真似か？」

「竜騎士の防具は薄く脆いものと聞く。こちらがこのような頑丈な鎧を纏っているのは対等な勝負はできぬ」

あくまで騎士道を捨てぬジャコブの精神に感銘を覚えたクロードは、自分も兜と鎧を脱いだ。二人は帷子のみとなり、お互いの顔を見合せてニヤリと笑った。

腰を落とし、剣を構える。相手の動きをじっと見据え、僅かな隙すら逃さぬよう精神を集中させる。

静かな時が流れる。すぐそばで戦が行われていることなど、まるで嘘であるかのようにクロードとジャコブには何も聞こえなくなっていた。

そのとき、突風が巻き起こった。バルコニーより入りこんできた激しい風が対峙する二人の体をすり抜けていった。それを合図にして、二人が同時に前へ踏み出した。剣と剣がぶつかり、心地良い金属音が鳴り響いた。クロードの竜が雄叫びを上げる。

二度目、三度目と繰り返して剣を振り上げ、ぶつけ合う。薄い帷子では一瞬の油断が命を落すことにもなりかねない。

「ハッ！」

「せいっ！」

四度目の激突の後、つばぜり合いが行われる。相手の瞳の中に、自らの姿を見る。ジャコブが柄を握る手に更に力を入れ、クロードを押し倒そうとする。クロードも全力を持ってそれに応える。体型はほぼ同じ、力の差もほぼ互角。

恐怖などはない。二人とも純粋に勝負を楽しんでいた。押したり引いたりを繰り返す中、ジャコブが口を開く。

「ヴァルザニアは何を以って、我々に戦を挑む？」

「祖国のため、戦のない理想国家を作ることだ」

クロードの言葉でジャコブが笑った。

「何を笑うか！」

クロードがこれまで以上の力でジャコブを押す。ジャコブは一瞬、すっと力を抜いて後ろへ退き、クロードから体を離れた。

「理想国家……竜の神の名を利用してか？」

「利用だと？ 言葉を慎め、これは神の意志だ」

ジャコブが鼻を鳴らした。

「神？ 神とはラウルのことか？」

「アデル王子の意志でもある」

「アデル……不幸な子よ。父亡き今、もはやラウルの人形と成り下がったようだな」

「貴様！」

クロードが踏み込み、剣を振る。ジャコブはさっと身を翻し、それを避けた。クロードはそのまま手首を捻り、剣を返した。ジャコブも素早く反応し、身を引いたが、微かに頬が裂け、血が流れ出した。

「やる……」

「アデル王子及びラウル参謀、並びに竜の神を侮辱するような言葉

は許さぬ」

「貴様もラウルの人形か？」

「黙れ！」

再び振りかざされたクロードの剣を、ジャコブは正面から受け止めた。

「貴様は何も知らん。真実を知りたいとは思わぬか？」

「真実？」

ジャコブの思わぬ言葉にクロードの力が一瞬抜け、右膝が曲がった。ジャコブがクロードを押し潰そうと一気に力を加える。

「しっ……真実とは何か……」

クロードは左手を柄に、右手を刃のほうへ移し、両側でジャコブの剣を受ける形へと態勢を変えた。どうにか立ち上がろうと膝に力を入れる。

「この勝負に勝つことができたら教えてやろう」

「ほざけ！」

ジャコブの言葉を侮辱と受け取ったクロードが発奮した。膝をグイッと一気に伸ばし、そのままの勢いでジャコブを弾き飛ばした。背中を床に打ち付け、仰向けに倒れたジャコブに向かって、クロードは剣を振り上げた。シュツと空気を切り裂き、剣が降り下ろされた。ジャコブは体を素早く左に転がして、それを避けた。クロードの剣は床に叩きつけられたのみだ。クロードが視線を移したときには、ジャコブは体を起こし、既に構えのポーズを取っていた。

再び剣をぶつけ合うときが訪れた。疲労が蓄積し、息が上がり、お互いの動きに隙が生まれ始めた。剣がそれぞれの体を掠め、傷を付けていく。もはやどちらが勝ってもおかしくはなかった。二人が戦う理由に、もはやヴァルザニアもプロメキアもなかった。己の誇りのため、騎士として、目の前にいる相手に勝ちたい。それだけだった。

互いの足が床を蹴った。こうして相手に向かって踏み込むのは幾度目か。

そのとき、大地を揺るがすほどの足音と歓声が鳴り響いた。ヴァルザニアの軍勢がジャコブの居城に踏み入ったのだ。

突然のことに気を取られたジャコブに大きな隙が生まれた。長き戦いの勝敗を分けた瞬間だった。クロードの剣がジャコブの胸に突き刺さり、噴き出した血が剣を伝い始めた。ジャコブは剣を落とし、両膝を地についた。

「ぐはっ……」

口から血を吐き、項垂れた。クロードはジャコブの体からそっと剣を抜き、仰向けに寝かせた。ジャコブが自らを嘲るように笑う。

「くっくくっ……あれしきのことで集中力を欠くとは……私も知れたものだな」

「いや、一つ間違えば、倒されていたのは私のほうかもしれない」

クロードがそう答えると、ジャコブは力なく笑った。

「約束だ。私の知る真実と言うのを教えてやろう……そなたたちヴァルザニアがコルドと戦をすることになった理由……あれはコルド王の裏切りではない」

「何？」

「プロメキア王……即ち私の兄がコルド王をそそのかし、狂気へ走らせたというのは偽りだと言っている」

「それでは我々をコルドとの戦に導いたのはいったい……」

「ラウル参謀……」

「馬鹿な……」

クロードは激しく首を振った。そんなことがあるはずはない。このままジャコブの言葉を鵜呑みにして良いものか。クロードは自分に言い聞かせた。彼の胸の内を読み取ったのか。ジャコブが笑う。

「信じるも信じぬもそなた次第……しかし竜の神は知っておるぞ」

「竜の神……？ どういうことか」

クロードの問いに、ジャコブは答えなかった。

「メキドの街の者を……良きに計らってやってくれ」
それが彼の最期の言葉だった。そこへヴァルザニアの兵たちがやってきた。

「クロード様！ 城内を含め、メキドの街は全て制圧いたしました。生き残った敵兵も全て降伏いたしました」

「うむ。御苦労であった」

クロードはジャコブを抱えて立ち上がった。

「クロード様……その方は……」

「この城の主、ジャコブ殿だ。騎士として立派な最期を遂げられた。彼の遺体は手厚く葬るように。良いな？」

第二章 一七一

メキドの陥落は直ちにプロメキア王の知るところとなった。

「メキドが落ちたと……ジャコブはどう致した？」

プロメキア王の問いかけに対して、側近であるレイモンは言葉を詰まらせた。

「ジャコブ様は……残念ながら……」

「馬鹿な……」

「騎士として立派な最期であったと聞いております」

プロメキア王ことマティスとジャコブは、幼き頃より常に競い合い、讃え合い、王族としてプロメキアを良き方向へ導いてゆくことを夢見ていた。二人は良き兄弟であり、好敵手であり、そして友であった。

ジャコブの死を知り、マティスが胸中穏やかでいられる筈はなかった。

「ガザール王に伝えよ。我らプロメキア、先にヴァルザニアを討つとな」

マティスの言葉に、レイモンは慌てた。

「お言葉ですが、それは早計過ぎるものかと……メキドの現状及び敵の兵力が如何ほどのものかも未だわかりかねております。ましてやメキドの壁を突破する手立てが我々には……」

皮肉なものだった。自国を守るために造られた絶壁が今は敵を守るものとなっていた。

「ジャコブを殺された恨みを堪えよと言うのか」

「今はまだ……」

「今、動かねばいつ動く！」

マティスが苛立ちを露わにしたところへ、一人の老人が口を挟んだ。

「レイモンの言う通りじゃ。今は動いてはならぬ」

マティスとジャコブの父、ジュネである。かつてはプロメキアを納める王であったが、現在は政より身を引き、マティスの補佐役に徹している。

「しかし父上……」

「ジャコブを失った心の痛み、わしにもようわかる。しかしながら機運はヴァルザニアのほうにある。今、動けば、その流れに飲まれてしまうことになる。じつと堪えるときじゃ」

「ぐっ……」

マティスは怒りに体を震わせながらも、冷静になるよう自らに言い聞かせた。

「レイモンよ」

「ハッ」

「引き続き、メキドの監視を続けよ。そしてもう一つ」

「はい」

「ジャコブの亡骸をこちらへ手渡すよう、ヴァルザニアに伝えよ。並びに国葬の手筈も抜かりないようにな」

レイモンが下がった後、ジュネは悲しげな声でマティスに言った。「マティスよ。王とはかように私情を堪えねばならんときが幾度となく訪れるもんなのじゃ。そなたをそのような運命に導いたワシを許せ」

マティスの体はまだ微かに震えていた。



ヴァルザニアはメキドに大多数の兵力を配備した。開戦当初の企て通り、プロメキア侵攻の拠点とするためである。降伏した兵たちは武装解除させ、捕虜として扱う。街人には従来 of 生活を保障する一方で、ヴァルザニアに対する絶対的な服従を約束させた。

ヴァルザニア本国よりメキドの統括指揮官としてファビアンが派遣された。ファビアンはラウル参謀の信奉者の代表格とも言える存

在であった。そのため、ラウルから賜る信頼は能力以上になっていた。此度の人事に不満を持つ者がいないと言えば嘘である。

ファビアンは自らの居城となるメキド城を上機嫌で散策していた。案内役を務めるのは、先陣を切った竜騎士部隊の隊長ブリスである「どうか？　ここの使い心地は？」

「ファビアン様のようなご立派な方には多少物足りぬ部分はあるかとございますが、

それでもなかなかのものでございます」

「カッカッカッカ、そうか。それは良いのう」

「ところで、ファビアン様にお見せしたものがございます」

「見せたいもの？」

「こちらへどうぞ」

ブリスに連れられてファビアンが入ったのは、城の奥深く、陽の光がほとんど届かない薄暗く狭い部屋だった。いくつかの木製のテーブルと椅子が並んでいる。

「このようなところに何がある？」

「これでございます」

ブリスがファビアンに差し出したのは、数枚の丸めた紙だった。

「ほう。宝の在処を示した地図でも発見したか？」

「そう言っても良いほどの物でございます」

兵がテーブルの上で一枚の紙を広げると、ファビアンの口から感嘆の声が漏れた。

「これは……」

「連射砲台の設計図でございます。こちらもご覧ください。此度の戦で奴らが見せた銃の設計図です。ここにおった技術者たちが何やら不審な様子であったので、問い詰めたところ、これらが出てきたというわけでございます」

「思わぬ戦利品が手に入ったというわけか。でかしたぞ」

ファビアンがブリスの肩を叩いて、褒め称える。しかしブリスに

はまだ秘め事があった。

「いいえ。ファビアン様。喜ぶのはまだ早ようございます」

「何？　どういうことか」

「これが本当の宝です」

ブリスが意気揚々と広げた紙を見て、ファビアンは驚きで言葉を失った。

「いかがでございますか？」

得意げに笑うブリスに対して、ファビアンはどうか言葉を絞り出した。

「まさか、これは……」

「はい。船、それも飛行船の設計図でございます」

飛行船。誰もが名くらいは知っているが、空想の産物であり、実現不可能なものとしていた。

「これを見る限り随分と巨大な物のようだが、果たして飛ぶことができるのか？　形だけ作るのは容易だろうが、実際に飛ばなければ話にならぬぞ」

「技術者に尋ねましたところ、計算上は可能だと」

「信じるに足るものか……しかし技術力に優れたプロメキアのこと、実現できるやもしれんな。現在、開発はどの程度進んでおるのだ？」

「それが未だ設計段階で、それ以上にはなっておらぬとのことですが飛行船と竜騎士部隊が連携すれば、制空権は思いのまま。まさにヴァルザニアは最強となる。ファビアンにもそのくらいのことは容易に察しが付いた。

「技術者の者たちは？」

「他の兵たちと同じく、地下牢に監禁しております」
ファビアンは「うむ」と頷き、勢いよくブリスに命じた。

「一部の者はこちらで飛行船の開発を続けさせよ。残りは設計図と共にヴァルザニア本国へと連れ帰り、連射砲台と銃の製作技術を習得させよ」

（これはラウル様もたいそう喜びなさる）

ファビアンは静かにほくそ笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4264w/>

竜の導き

2012年1月4日21時48分発行